

Fate/Destroyed Order

防要塞 唯我

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

それは、壊されてもなお世界を救う物語。

※平成仮面ライダーシリーズとFate／Grand Orderのクロスオーバー作品になります。

# 目次

予告編

Fate/Destroyed Order

1

序章 「炎上汚染都市 冬木」予告

13

序章 炎上汚染都市 冬木

第一話 「Re:Imagination

Grand Order」 | 17

第二話 「世界の破壊者（門矢士という

男）」 | 34

第三話 「破壊された聖杯戦争」

49

第四話 「贗作者対破壊者」 | 71

第五話 「最終仮面端末（ケータツチ）」

96



## 予告編

## F a t e / D e s t r o y e d O r d e r 予告編

「人理焼却は既になされた。その偉業はつつがなく進行されている。だが、首謀者にも予期せぬ例<sup>イレギュラー</sup>外が生まれた。私の名は鳴滝。この例<sup>イレギュラー</sup>外を最もよく知るもの。そしてその男の結末を見届けるために、番<sup>ウオッチャー</sup>人のクラスを持つて召喚されたサーヴァントだ」

人理定礎値：C？

始まりの地

序章

A D . 2 0 0 4 炎上汚染都市 冬木

六騎のみの聖杯戦争

最終英雄端末

贖作対決

英雄の記録

有り得ざる七騎目

世界の破壊者

全てを壊し変革するもの

英雄に恋焦がれた者

カルデアを経由しない契約

永き旅の朋友

破壊の化身

「破壊者は既にこの世界に降り立った。その男の名は仮面ライダーディケイド。本来この世界では創作物としてあるはずの存在である。ディケイドが顕れた以上、この世界も破壊されるだろう。故に、此度の聖杯探索はこれまでのものとも違う、歪んだものになるに違いない。」

人理定礎値：C＋十

第一の聖杯

救国の聖女

A D・1431 竜??百年戦争 オルレアン

二つの幻想大剣・天魔失墜  
サーヴァントとサーヴァント  
かつての主従

叡智の指輪

六騎の狂化仮面騎兵

真理とマリー

指輪の魔法使い

中華民族の始祖

利己主義の戦士

無限の希望を秘める指輪

剣士を殺す者

竜の牙を播いた王

「歪められた戦いの中では、本来よりも強力な敵戦力も現れることだろう。——だが、悲観することは無い。」

人理定礎値A—

第二の聖杯

薔薇の皇帝

AD・0060

???? 狂気帝国 セプテム

堕ちた追跡者

小さな勇車達

頻発する重加速

背教者と呼ばれた皇帝

英雄刑事

002、003、009

最大版図に至った皇帝

狙われた皇帝



勝るものなき我が愛車

「それぞれの地には歴史に名を残す英雄のみならず、仮面ライダーが召喚されているからだ。しかし、彼らが召喚された理由はデイケイドによって世界が破壊されたからだ。おのれデイケイド！ それ故に、デイケイド——お前はその責任を取らねばならない」

人理定礎値A？

第三の聖杯

嵐の航海者

A D · 1 5 7 3

封鎖終局??海 オケアノス

月の海

シラクサの学士

ラビットハッチ

変・身・装・置

インド支配の第一人者

青・春・騎・兵

暴走する「正義の心」

流・星・雨・如

人が生み出した悪魔

2つの谷と1つの岬

友・情・不・滅

「勿論、仮面ライダーも善なるものばかりではない。人類最後のマスター——君に敵対する者もいるだろう。だが、基本的に仮面ライダーは英雄だ。当然、君を阻もうとする仮面ライダーがいるように君に手を貸す仮面ライダーもいる」

人理定礎値：A

第四の聖杯

ロンディニウムの騎士

A D . 1 8 8 8

都 市      ロンドン

?????????

## 地球の記憶

裏切りのJ

既に倒れた黒幕

張り巡らされた蜘蛛の糸

二人で一人の仮面探偵

明かされる幼少期の真実

さあ、お前の罪を数えろ

スコットランドヤード機能継続

安楽椅子のC

「その仮面ライダー達は主にデイケイドの後に生まれた者達だ。中には面識のある者もいるだろう。だがしかし、デイケイドは世界の破壊者である。その事を忘れてはいけない。お前が彼らに協力を望むというのなら、普段の旅と同様に彼らとぶつかり合う必要があるだろう。」

人理定礎値：A++

第五の聖杯

鋼鉄の白衣

A.D. 1783 英雄

始まりの征服者 コンキスタドル  
????????

集う眼魂英霊

霊体適正

壬生狼

天眼の女剣士

命を燃やす若き英雄

十五英雄との共闘

炎の銃使い

求道の音楽家

魂を秘めし眼球

天駆ける竜が如く

イ・プルーリバス・ウナム

「人類最後のマスターよ、君にそのデメリットを押しつけてまでデイケイドと契約する気があるというのなら私は止めない。私は本来の状態から歪められた君の事情も把握している。そのまま突き進みなさい」

人理定礎値：EX

第六の聖杯

輝けるアガートラ

AD・1273

??????????

キヤメロツト

心の叫び

詩情の破壊者と呼ばれた男

美しきこの世界

新たなるメダル

手を伸ばし続ける旅人

二人の弟子

王の証

伝説の義賊

兄弟作家

「私は君に警告することしか出来ない。だが、どのような結末であろうと見届けると約束しよう」

人理定礎値：ERROR

第七の聖杯

天の鎖

BC・2600

????  
魔森  
????

????????????

脱出王と第六天魔王

捕虜となった三騎

送り込まれた密偵

背負った七つの大罪

新しき神

禁断の果実

展開された森

第三の千里眼

固有結界：ヘルヘイム

全アーマードライダー集結

「それでは、君達の戦いの始まりだ。」

F a t e / D e s t r o y e d O r d e r

「デイケイドよ、例えばどんな幸福な結末を迎えたとしてもお前がいる限り、世界は破壊される。それだけは覚えておいた方が良い」

2018年夏頃公開予定



# 序章 「炎上汚染都市 冬木」 予告

新番組！

Fate／Destroyed Order

旅を続ける仮面ライダーディケイドこと門矢士。そんな彼が今回通りすがった世界は「Fate／Grand Order」の世界だった。『仮面ライダー』の存在がテレビの中のヒーローとしてあるこの世界で、その瞳は何を見る!?

「どうやら、今回の俺の役割はあんたのサーヴァントって所らしいな」

「もしかして……あなた門矢士?」

ディケイド、彼の行く先では普通では起こりえないことが起こる。それ故に彼は世界の破壊者と呼ばれる。

「一体何者なの、このサーヴァント……それにこの感じ、契約にカルデアのシステムが介されていない? ということはこのサーヴァントはこの聖杯戦争の七騎のうちの一騎ってことなのかしら……」

「考えるのはあとにした方が良さそうだ。どうやら、お客さんらしいぞ、マスター」

彼と、彼を呼び寄せたマスターである藤丸リツカ、そしてマシユ・キリエライトは特異点Fの戦いに否応なく巻き込まれていく。

「どうやら、ようやく役者が揃ったらしいな。とりあえず手合わせと行こうぜ、ライダー」

「ようやくマトモに話を通じるサーヴァントが現れたと思ったたらこれか。仕方ない、ちよつと遊ぼう。『変身!』」

【KAMEN RIDE】

【DECADE】

「貴様、まさか……仮面ライダーか？」

「俺のことは知ってるとは、この世界では俺は本当に創作物らしい。だが、お前も相当な偽物だな？」

「ふつ、察しが良いな。だが、貴様も他人の力を借りて戦うタイプだろうか？ 贋作者同士、力比べと行こう」

「贗作者か、確かに俺もそう言う口なのかもしれないな。だが、生憎と俺は破壊者だ。ちよつとお門違いって話だな」

「それは失礼。オレもかなり壊れていてね。そろそろ始めるとしようか。だが、オレの動きに貴様はついてこれるか?」

「ふつ、お前の方こそ俺について来れるか?」

【KAMEN RIDE】

【KABUTO】

【ATTACK RIDE】

【CLOCK UP】

「リツカ、宝具を使う。いいな?」

「いいよ。やっちゃって、士」

「さて、それじゃあ見せてやる。最終英雄<sup>ケ</sup>端末<sup>タツ</sup>」

【KUUGA、AGITO、RYUKI、FAIZ、BLADE、HIBIKI、KABUTO、DEN—O、KIVA】

【FINAL KAMEN RIDE DE DE DE DECADE】

そして、彼らは汚染された聖杯の守護者と対面する。

「貴様らの旅は終わる。案山子<sup>ごっこ</sup>も辞めにしよう。さらばだ、人類最後のマスター。破壊者と呼んだのが貴様の運の尽きだ」

「違うな。俺たちの旅はまだ始まってすらいない。——」

F a t e / D e s t r o y e d O r d e r

2019年4月1日スタート!

「Dr. ロマンとか言ったか。それとも、こう呼んだ方が良いか?」

「……! キミはまさかあの時のことを覚えているのかい、ライダー? ?????? いや、バーサーカー」

「ああ、だいたい分かってるさ、だから俺はここに再び来たのかもしれないな」

## 序章 炎上汚染都市 冬木

## 第一話 「Re・i m a g i n a t i o n Grand Order」

「全く、雑魚ばかりだな。直ぐに片付けるとするか」

顔にバーコードのようなマークが刻まれたマゼンタカラーの戦士は、襲いくる骸骨兵スケルトンをいなしながらそう告げて、腰につけたカードケースから一枚のカードを取り出し、ベルトに挿入する。

A T T A C K R I D E

B L A S T

読みあげる声が聞こえたかと思うと五体の骸骨兵は爆発四散し、辺りに骨の残骸が無造作に散らばった。

その様子を見ながら、赤髪の少女―藤丸リツカは感嘆の声を上げる。

「すごい……本当に仮面ライダーはいたんだ！」

彼女は、自分が戦場に足を踏み入れることになったきつかけを思い出す。そう、日本

を出たあの時から全ては始まっていたんだと。

日本の大型空港。その空港のラウンジで、一人の少女が電話をかけている。

「あ、もしもし。アタルくん？ 今日の夜母さんに会うはずだよね？ 悪いんだけどその時に、私の部屋の服、押し入れにしまっておいてもらうように言っと思ってもらえるかな？」

彼女の名前は藤丸リツカ。16歳で、先日まで高校生として暮らしていた少女である。

「うん、うっかりしてて箱出しっぱにしちゃってさ。一応連絡はしたんだけど電話通じないし、今から私も連絡取れなくなるからお願いたいたいんだけど……」

そんな彼女だが、今は高校を休学し、ある特殊な任務のために日本を発とうとしている。

「ありがとう。じゃあ、行ってくるよ。なかなか連絡も取れないと思うけど、なるべくマメに連絡するよ。お兄さん——シンゴさんにもよろしくね」

その任務というのは——

「電話は終わったかい？ リツカちゃん」

「茜沢さん。お待たせしちやつてすみません」

その任務というのは、彼女に声を掛けた西洋風の男、ハリー・茜沢・アンダーソンによつてもたらされたものである。

国連主導で行われる国際的なプロジェクトであるらしく、人類のためにどうしても必要だと言われ、リツカは高校を休学してまでその国際機関——フィニス・カルデアに向かうことにしたのであった。

「オーケイ、じゃあカルデアに向かうとしようか。言っておくけど、すごく寒いから防寒具はカバンから出しておくことを勧めるよ」  
「分かりました！」

リツカは、カルデアがある場所は標高6000mを超える山の中だと聞いていた。もちろん、日本からでたことがないような女子高生にそれがどれほど厳しい環境なのか想像出来る訳もなく。結果としてリツカは現地で寒さに震えることになる。

「リツカちゃん、大丈夫かい？」

「こんなくらい、なんてことないです……！ 私はヒーローになる女……折れません」

寒さでガチガチと歯を震わせながら言うリツカだが、当然説得力はない。

「——塩基配列 ヒトゲノムと確認。——靈器属性 善性・秩序と確認。ようこそ、人類の未来を語る資料館へ。ここは人理継続保障機関 カルデア——」

ガチガチと震えるリツカの情報をカルデアの入口に備え付けられた機器が解析していく。

「これ、何分くらいかかるんですか？」

「多分もうそろそろだとは思うけど……本当に大丈夫かい？」

「大丈夫ですって！」

「はじめまして。貴方は本日最後の来館者です。どうぞ善き時間をお過ごしください」

アナウンスが鳴り響き、扉が開く。リツカはもう耐えられないとばかりに建物に飛び込み、そして勢い余って内扉に頭をぶつけた。

「へぶっ!？」

「やっぱり大丈夫じゃないじゃないか……全く、二重扉って説明をする前に飛び出すなんて、なかなかに遅しいね」

「……申し訳ございません。入館手続きにあと180秒必要です。その間、模擬戦闘をお楽しみください」

「へっ?」

「リツカちゃん、君はマスター候補だ。このタイミングで訓練をしておくのも良いんじゃないか? ほら、スコアの記録もしないみたいだしさ」



「何だかよくわからないですが、やってやりますよ!」

そうして、わけも分からないままにリツカは模擬戦闘に突入し、そして……惨敗した。

「聞いてません!!」

「確かに説明が足りなかったかもね……」

「私、指揮とかやったことないんですけど!」

「うん、その辺に關してはこっちの説明不足だ、申し訳ない。そうだ、ちょうど良い機会だし、歩きながら説明しよう。君の仕事は——リツカちゃん?」

茜沢が振り返ると、そこでは藤丸リツカが床で爆睡していた。

「……………やれやれ。とりあえずドクターを呼びに行くかな」

そう言つて、彼は羽織つていた上着を彼女にかけ、医務室へと歩み始める。

『よう、バーサーカーとそのマスター。あんたらやりすぎだよ。子供に手をかけようだなんて、ゴールデンじゃないなあ!』

『ライダー!! 貴様には関係ないねえ! オレは殺したいから殺す! この世界を破壊してやるのさ!』

その頃、藤丸リツカは夢を見ていた。彼女が頻繁に見る夢で、自分に迫り来る怖い二人組から、ライダーと呼ばれた男が助けてくれる夢である。

『バーサーカー！ そのサーヴァントは任せる。 オレはガキをやるからよオ！』

「……ください。 ……きてください。 ……起きてください！」

その呼びかけで、リツカの意識は急速に回復する。

「あれ……私なんでこんな所で寝てるんだっけ……」

「フオーウ!!」

ボケつとした顔のリツカに、モフモフの生き物が飛びかかる。

「もうフオーウさん、いきなり飛びかかるのは辞めてください」

「フオーウ？ キュウ！」

フオーウと呼ばれたそのモコモコの生き物はリツカの顔を舐める。

「あはは、くすぐったいよ。 でも可愛い。 フオーウって言うの？」

「フオーウ!!」

「驚きました。 まさかフオーウさんがここまで初対面の人に懐くなんて……」

「フオーウ？ フォフオーウ」

少女がそういうとフオーウが、何かを勘づいた様子で、二人の元から離れていった。

「そう言えば……キミは？」

「ああ、そう言えばまだ自己紹介をしてませんでしたね。 わたしの名前は——」

そうしてその後、マシユ・キリエライトと名乗る少女と自己紹介をし合つて、後からやつてきたレフ・ライノールなる人物との会話の後、リツカはマシユに連れられてリツカは中央管制室での説明会に参加していた。——そして、その中で居眠りを行った結果、この施設の所長に平手打ちをもらい、説明会を追い出され、マシユと戻つてきたフォウと共に自室に案内されていた。

「さて、こちらが先輩の部屋になります。わたしはファーストミッションがあるので、ここで失礼します。あとはフォウさんが見てくださるそうです」

「フォウフォウ!!」

フォウが任せろ!と言わんばかりに元気よく鳴く。その様子を見て人の言葉を分かっているのではないか、とリツカは感じた。

「頼もしいよ。マシユもここまで案内してくれてありがとうね。ファーストミッション、頑張つて!」

「いえ、わたしはただ当然のことをしただけです。それでは、また機会があれば会いましょうね、先輩」

そう言つて、マシユは穏やかに微笑んだ後に去つていった。リツカはそれを見送ると、マシユに渡されたカードキーをかざして自分の部屋の扉を開けた。

「うわああ!? 誰だキミは!? ここはボクのサボり場の空き部屋だぞ! 誰の断りがあつて入つてくるんだい!?!」

「え、ここが私の部屋つて聞いたんですけど、貴方こそ誰ですか!?!」

部屋を開けた瞬間に、ポニーテールのゆるふわ系の男の姿がリツカの入る。もちろんリツカも困惑を隠せない。

「ああ……荷物が増えてるなどと思つたら。キミが最後のマスター候補の藤丸リツカ君だね。はじめまして。ボクは医療部門のトップのロマニ・アーキマン。みんなからはD r. ロマンと呼ばれてるよ。多分呼びやすいしキミもそう呼んでくれて構わないとも。」

「あ、私の荷物。先に来てたんだ」

リツカはD r. ロマンの話を聞くことなく、自分の荷物の内容を確認する。その中身は、仮面ライダーの変身ベルトを初めとした玩具であった。

「いきなり無視はひどくないかい!?! って……その荷物は。仮面ライダー……かな?」  
「知ってるんですか!?!」

リツカの目が輝き、さつきは完全に無視したD r. ロマンの方に食い気味で詰め寄る。

そのあまりの身のこなしの速さにロマンは困惑しながらも返事を返す。

「ああ……以前日本に旅行に行った時にたまたま見かけてね。ハマっちゃったんだ」

「本当に!? 海外つて聞いてたので趣味の話ができる人がいるとは思いませんでした!!  
好きな仮面ライダーはなんですか? あと——」

興奮して、テンションの上がつてしまったりリツカはその後D r. ロマンを質問攻めにし、彼をタジタジにさせていた。そんな中、レフからの通信があり、ロマンはサボりがバレるとボヤキながら部屋を出ようとする。

その瞬間、館内が揺れたかと思うと警報が鳴り響いた。

「今のは爆発音か!? 一体何が! モニター、管制室を映してくれ!」

「管制室つて……マシユ!」

モニターに映し出された管制室は、炎上していた。それを見るや否や、リツカは部屋を飛び出す。彼女の心がそうしろと告げたのだ。ここで走らないと、憧れのヒーローに笑われてしまう。そう思った彼女は考えるより先に走り出していた。

「リツカちゃん!?!」

「ごめんなさいドクター、私マシユを助けに行かないと!」

「ああ、ちよつと待って!! キミ一人だと危ないしボクも行く!」

D r. ロマンは、意外と脚力のあるリツカに追いつかれないように全力で走る。そし

て、管制室に入ったところでようやく追いついた。

「リツカちゃん……走るの早いね……でも、ここの隔壁ももう閉まっちゃうから早く出ないと……!」

「私、マシユを探さないと行けないんで、ドクターは先に避難してください!」

「リツカちゃん!! 仕方ない、隔壁が閉まる前に対応できる場所に行つて後から開けるようにするしか……!」

そう言つてDr. ロマンはやむを得ず部屋から立ち去つた。管制室にはリツカが一人取り残され、燃え盛る炎の中でたった一人でマシユを探す。

「フオウ!」

正確にはフオウも着いてきていたので一人と一匹だったが、それでも絶望的な状況には変わりはない。

だが——しばらくしてリツカはマシユを見つけた。

「マシユ!!」

「あ………れ……先輩、どうしてここに……?」

見つけたマシユの体はボロボロでも助かるような状況ではなかった。

「しつかり、今助ける!」

しかし、藤丸リツカは諦めない。彼女が憧れた英雄達はみんな、どんな絶望的な状況

でも諦めなかったからだ。

「ダメですよ……このままだと先輩まで……」

せめて先輩だけとは思ひ自らを見捨ててくれと願うマシユと、諦めるという選択肢を持たないリツカ。その二人が至る結末は当然、二人とも死ぬというのが普通である。だが、リツカは諦めなかった。

「私は絶対に諦めない！ 私の憧れたヒーロー達はどんなときも最後には立ち上がった。だから、私も折れない!! 手を出してマシユ。絶対助ける!」

そして。その強い意志はマシユと、彼女の中に眠る英霊の心を動かした。警報が鳴り、隔壁が閉鎖され、よく分からないままレイシフトプログラムが起動する中でも諦めなかったリツカの意志に、二人は心動かされたのだ。

そして、手を繋いだままの二人は無事特異点へのレイシフトに成功するのだった。

「……ぱい。……先輩！ 起きてください、先輩!!」

「フオウ、フオウフオウフオウ!」

「あれ……マシユ、フオウ。それにこの街は一体……あ、これは夢か」

藤丸リツカが再び目を覚ますと、そこは燃え盛る街の中であった。起こしてくれた後

輩の姿と、その肩に乗るふわふわの生き物以外は見慣れない景色。先程のシチュエーションと被るところもあり、リツカは夢を見ていると錯覚する。

「夢じゃないです。早く起きてください、先輩。現在不明な敵性体との交戦中です！わたしも急なことなのでずっと眠っている先輩をお守りしながら戦える自信はありません！」

徐々にリツカの意識が覚醒していくと、マシユとフオウの他に誰かがいるのが分かる。——いや、誰かではない。あれは人ではなく、人の姿をした化け物だ。それは明瞭としない意識のリツカにも察せられた。骨で出来た人型、スケルトンと呼ばれる類の怪物だ。もちろん、本来の現代日本には存在しないはずのものである。

「……闘わないと。……私が護らないと」

ぼんやりとしたままりツカは立ち上がり、拳を構えて飛び出す。

「先輩!? 危ないです、下がってください!」

「フオウ!? フオウフオウ!」

マシユの静止も聞かず怪物に拳を振りかざすリツカ、その拳は怪物に直撃し、その体を吹き飛ばす……という事は無く。一切のダメージを与えることは無かった。

「痛っ!?!」

むしろ拳に衝撃が反射した為に、彼女自身がダメージを受けてしまう。そして、それ



によって生まれた隙を異形は見逃さなかった。その命を断とうと、手に持った剣のような武器をリツカに振り下ろす。

「先輩!? ダメです、間に合わない……………」

他の怪物と対峙していたマシユが、リツカを守ろうと咄嗟に飛び出すが、どう考えても間に合わなかった。そして、振り下ろされた剣のようなものが、リツカの体を切りつけるかと思われた瞬間、彼女を守るが如く障壁が展開され、刃を弾く。

「一体何がどうなってるの!? 貴方たち、説明してくれるのよね?」

そう言いながらマシユとリツカの背後から現れたのは、カルデアの所長、オルガマリー・アニメスフィアその人であった。

「所長! …ご無事だったんですね……………」

マシユが喜びの声を上げたが、オルガマリーの後ろから迫るものを見て顔を青くする。大量のスケルトンが、彼女の行動に反応して、後ろから迫ってきていたのだ。

「大量のスケルトン……………どうしてわたしばかりこんな目にあうのよ! ……こんな時、レフがいてくれたら……………」

自分の置かれた状況を直視することが出来ずに、ヒステリックに叫ぶ彼女。しかし、逼迫した危機的状况が彼女を無理やり現実を引き戻させる。

「……………とりあえず今はこの場をやり過ごす方法を考えるしかないわね。キリエライト、

酷かもしれないけど手を動かしながら質問に答えなさい。貴女、今デミ・サーヴァントになつてゐるわね？」

「はい。レイシフトの際にわたしの内部に眠る英霊から契約を持ちかけられ、そのおかげで今もわたしはここにいます」

盾で攻撃を受け止め、シールドバッシュにより敵を捌きながらマシユは答える。

「……それで、マスターはそのバカな一般人ね？」

「はい。わたしが先輩をマスターとして契約させて頂きました。本来なら許可などをとるべきだとは思いますが、有事だったのでやむを得ずこちら側から一方的に契約をさせて頂きました」

「フオウ、フオウフオウ！」

マシユは悪くないとばかりにフオウが声をあげる。しかし、そんな事を言うまでもなく、オルガマリーの瞳にマシユを糾弾する様子は無かった。

「なるほど、状況は分かりました。マシユ、悪いけどもう少し凌いでくれるかしら。この状況を打開するために、新たなサーヴァントを召喚します」

オルガマリーは腹を括った。誰の助けも得られない絶望的な状況が、彼女に指揮官として最適な解——生還の為の一手——を選ばせたのだ。



の悪を敷く者。汝三大の言霊を纏う七天。抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ!!」

リツカが詠唱を終えると、魔力が爆発的に広がり、彼女が手を掲げた先から人影が見えた。やがて、光が消えると、そこには一人の男が立っていた。

「……ここは、何の世界だ?」

「もしかして……あなた門矢士?」

その瞬間、動揺を隠せないリツカのポケットから一枚のカード——デイケイドのライダーカード——が零れ落ちた。

この瞬間、この世界は再び破壊された。

時を同じくして、冬木のとある場所でドルイドの装束の男が一人空を見上げながら呟いた。

「ようやく、七騎揃ったか……。聖杯戦争のスタート……にしては脱落者が多すぎるかねえ」

次回、Fate／Destroyed Order

「どうやら、今回の俺の役割はあんたのサーヴァントって所らしいな」

「一体何がどうなってるの!？」

「デイケイドは世界の破壊者……それを君は分かっているのかね？」

「とりあえず、サイン貰えませんか？」

「先輩！ あれは、正常なサーヴァントです！」

「どうやら、ようやく役者が揃ったらしいな。とりあえず手合わせと行こうぜ、ライダー」

## 第2話 「門矢士と、いっとう男世界の破壊者」

全てを破壊し、全てを救え！

## 第二話 「世界の破壊者（門矢士という男）」

「もしかして……あなた門矢士？」

そのリツカの呼びかけに対して怪訝そうな表情を浮かべた男だったが、彼女の姿を見て、その表情が固まる。

「お前は……なるほど。そういうことか」

男はそう小さく零す。その内容はリツカには聞こえなかったらしく彼女は聞き返した。

「え、今なんて……」

「だいたい分かった、それだけのことさ。どうやら、今回の俺の役割はあんたのサーヴァントって所らしいな」

「門矢士が……私のサーヴァント!？」

リツカは思わず声を上げる。彼女からすれば、これまで焦がれてきたヒーローが、自分の使い魔となるのはそれだけの反応があっても無理もないことではあったが、その声に反応してスケルトンの群れから一部が彼女たちの方に向かってくる。

「ひいひい！ 藤丸、何やってるのよー」

「どうやら……詳しい話はいいつらを倒してからの方が良さそうだ。マスター、準備は良いか？」

「え、私？」

「お前以外に俺のマスターはいないだろう？ 戦闘に移るが、良いな？」

「う、うん。 やっちゃって！」

マスターと呼ばれたことに困惑しつつも、藤丸はサーヴァントを名乗る男に戦闘を命じる。

「それじゃあ、軽く蹴散らしてやるか」

そう呟きながら、男は懐からバックルを取り出し腰に当てる。するとベルトが伸び、腰に巻き付けられた。バックル部を引いて中央部を90度傾ける。そして、ベルトに取り付けられているホルダーからカードを取り出し顔の前に掲げる。

「変身！」

KAMEN RIDE

DECADE

その掛け声と共にバックル部分に取り出したカードを挿入。再び中央部を元の位置に戻すことで認識音が響き、男は一瞬のうちへ「仮面ライダー」へと姿を変えた。

「い、一体何がどうなってるの？ このサーヴァントは何者なのよ？」

困惑する所長にリツカは誇らしげに語る。

「彼は、門矢士は仮面ライダー。日本に伝わる正義の味方です！」

ホルダーを剣の形に変形させ、「仮面ライダー」はスケルトンの群れに迫る。そして、近づくや否やそれを横に振りかざしスケルトンを薙ぎ払った。そのまま別のスケルトンにも斬りかかり、次々にそれらを蹴散らしていく。そして一度ホルダーを腰に戻したかと思うと、一言つぶやく。

「全く、雑魚ばかりだな。直ぐに片付けるとするか」

スケルトンをいなしながらそう告げて、ホルダーから一枚のカードを取り出して、ベルトに読み込ませる。

A T T A C K   R I D E

B L A S T

読みあげる声が聞こえたかと思うと五体の骸骨兵は爆発四散し、辺りに骨の残骸が無造作に散らばった。

その様子を見ながら、リツカは感嘆の声を上げる。

「すごい……本当に仮面ライダーはいたんだ！」

「これが……仮面ライダー……」

オルガマリーが呆気にとられる中、戦いを終えたマシユと「仮面ライダー」は2人の



元へと戻ってくる。

「先輩、所長、やりましたね。なんとかこの場を凌げました。そちらのサーヴァントの方もありがとうございます。宜しければ名前をお伺いしても？」

戦闘の中で興奮したのか、マシユが早口で話しかけたのに対して、「仮面ライダー」はその変身を解いて彼女の問いに応じる。

「門矢士、仮面ライダー・ディケイドだ。一応クラスはライダーってことになってる」

「士さん……ですね。改めまして先輩と所長を助けてくれてありがとうございます。貴方がいなければ恐らく我々は全滅してました。あ、申し遅れました。わたしはマシユ・キリエライトと言います」

「マシユ・キリエライトか。覚えておこう。なに、マスターを守るのはサーヴァントの務めってやつなんだろう？ 俺もそれをしただけさ」

ぶつきらばうにそう告げる士に対して、マシユはその人間性を把握したのか、思わず微笑んだ。

一方のリツカとオルガマリーだが、混乱しているオルガマリーを後目に、リツカは先程ポケットからこぼれ落ちた玩具のライダーカードを持って士の元へ駆け寄り、一言。

「とりあえず、サイン貰えませんか？」

「は？」

「へ？」

「ええ……」

「フオウ……!？」

それは混乱していたオルガマリーを含めその場に居た三人十一匹が全員困惑する発言であった。しかし、リツカは至って大真面目である。憧れのヒーローに会ったのだ。サインのひとつくらい貰っておきたい。そう考えるのは当然の帰結ではあった。

「とりあえずサインは後だ、マスター。事態が解決したらいくらでもしてやる」

妙な空気を破るべく士が口を開いた直後、彼らの前にベージュのフェルト帽を被った男が現れる。

「ディケイド、少女達を救ってヒーロー気取りか？」

「鳴滝。まさかお前までここに來てるとはな」

「士さんのお知り合いですか？」

「ああ。こいつは鳴滝。俺の行く先々に現れて邪魔をしてくるやつだ」

「おのれディケイド！ もっとまともな紹介の仕方は無かったのか！」

鳴滝と呼ばれた男は士へのあたりが厳しいということとは会って間もないマシユやオルガマリーにも伝わっていた。一方リツカは、鳴滝の方に近づき頭を下げながらこう告げた。

「とりあえず、サイン貰えませんか？」

「節操なしかお前！」

士の時と同じようにサインを強請るリツカ。耐えきれなくなった士が思わず突っ込むと、そこには割と上機嫌でサインを書いている鳴滝の姿があった。

「お前もノリノリか！」

「サインを求められたら応える、その何が悪い！」

「お前そんなタイプだったか……？」

柄ではないとは思いつつも思わず突っ込んでしまう士であった。そして、サインのくだりがつつがなく終えた後、神妙な顔持ちで鳴滝は告げる。

「藤丸リツカ。君はデイケイドを召喚してしまった。デイケイドは世界の破壊者、それを君は分かっているのかね？」

「もちろん知っています。それでも、仮面ライダーデイケイドは私にとってヒーローだから、私は彼を信じます」

「それは、いざれ後悔するかもしれないとしてもかね？」

「はい。そうだったとしてもです」

「どうやら、君の意思は硬いからこれ以上止めることは出来ないな。だが、覚えていて欲しい。デイケイドが現れた時点で世界は破壊され、奴がいる限り世界は破壊され

続ける……！」

「知ってますよ。デイケイドは確かに世界の破壊者かもしれない。でも、その破壊はきつと悪じゃない。私はそう信じてます。だって私——」

そこでリツカは一度口を閉じてから鳴滝に微笑みかけながら告げる。

「貴方達のファンですから」

「なっ……」

鳴滝もその返答は予想してなかったのか、一瞬虚をつかれた用に固まってから、被っているフェルト帽の位置を整えながら彼女に語りかける。

「その返答は予想できなかったな。私は行くが、君にまた会いたくなかった。——だから教えておこう。ここに君たちの敵の——つまるところ狂ったサーヴァントが近づいてきている。もしその襲撃を乗りこえ、堕ちたサーヴァントを一掃してこの特異点を無事脱出することが出来たのなら………また会おう。人類最後のマスター、藤丸リツカ」

そう言つて鳴滝はどこからともなく現れた時空の歪みのような所へと消えていった。その様子を見届けた士は少し口角を上げる。

「鳴滝のやつ………どうやら相当驚いたらしい」

「彼は一体何者なの………？ いえ、そんなことより今重要なのは彼の去り際の言葉ね、私の聞き間違いじゃなければサーヴァントが迫つてるとか言つてなかった!？」

オルガマリーがあたふたし始めた瞬間、どこからともなくナイフが飛んでくる。その存在に気づいたのは士だけだった。

「マシユ！ 盾をその女に！」

「えーと、はい！」

「フオウ!!」

士の咄嗟の判断に、マシユは困惑しながらもデミ・サーヴァント化してオルガマリーの前に盾を展開する。その防御は辛うじて間に合い、盾はナイフを弾いた。

「敵襲ですか!?!」

「もう来てる!?!」

「どうやらそうらしい。敵の姿は見えないが、確実にこの近くにいるはずだ」

マシユとリツカの口から零れた問いに応えたのは既に変身を終えたディケイドだった。その姿を見て四人と一匹は臨戦態勢に入る。

「敵性個体、所在不明との戦闘を回避します。マスターと所長、フオウさんは下がって——」

「待ちなさい」

マシユの言葉を遮ったのはオルガマリー。動揺した際の瞳ではなくどこまでも冷静な魔術師の眼をしていた。

「敵のサーヴアメントはおそらくアサシン。暗殺者のクラスよ。私の事を狙ってきたことから見るに、次も戦闘能力が低い私か藤丸をマスターと踏んで攻めてくるはず。だから貴方は私達の防衛に専念して」

「は、はい！」

淡々と状況分析を行い指示を出し始める彼女の姿に、マシユは困惑しながらもどこか嬉しそうな表情をしている。

「藤丸もマシユから離れないこと。そして——カドヤとか言ったかしら？ 貴方には一人でアサシンと戦ってもらいます。アサシン自体の戦闘能力は高くないのでおそらく貴方の力があれば十分突破できるでしょう。問題はアサシンの持つ気配遮断という隠密行動用のクラススキルだけでも……」

説明中に二本目のナイフが飛んできてマシユが再びそれを弾く。そして、言葉が途切れたタイミングで、リツカが呑気そうに手を挙げてオルガマリーに質問をする。

「あのー、所長？ その気配遮断って、自分の居場所を悟られにくくするとかそういう感じの能力ですか？」

「ええ、そうよ。攻撃の瞬間以外は認識が難しいと考えてもらって構わないわ。それがどうかしたの？」

「士さん、それならペガサスフォームで何とかならない？」

「……ああ、なるほど。だいたい分かった。多分大丈夫だ」

二人の間のやり取りは、他のメンバーにはよく伝わらなかつたらしく、皆一様によくわからないと言った顔をしている。

「よく分からないけど、対応策があるってことなのよね？　そこは貴方たち2人を信じます」

「フオウフオウ！」

「どうやら組織のお偉い人らしいからな、ここで俺の実力をしつかりと見せておくのも——悪くない」

そう言つてデイケイドは腰のホルダーから1枚のカード——体の緑色が特徴的なボウガンを構えた戦士が描かれているもの——を取り出し、ベルトに挿入する。

「変身！」

FORM RIDE

KUGA PEGASUS

読み上げ音の後、デイケイドの姿は全く別の仮面ライダー——緑の戦士と呼ばれる仮面ライダークウガのペガサスフォーム——へと変貌を遂げていた。

そして彼は地面に足をつき、出現したボウガンを構える。

一秒、二秒と緊張のまま膠着する状況。それを破つたのは、三度飛来するナイフだつ

た。

「そこだー！」

ベガスフォーム

緑の戦士の力により研ぎ澄まされた超感覚で、一瞬の動きから敵の位置を特定した  
ディケイドクウガ。一切のブレなく、正確に敵のいる座標へと狙撃を放つ。飛んできた  
ナイフはマシユによって、彼にあたる前に防がれる。

「ぐわああ!!」

狙撃を放った先から断末魔ともに爆発音がする。

「反応がない。どうやら仕留めきれたようだ」

そう言いながら、士は変身を解く。マシユも、デミ・サーヴァント化を解き、その場  
にへたりこんだ。

「それにしても、よく俺に攻撃が来るってわかったな?」

士は、あまり驚いたような様子はなく、マシユに尋ねる。

「もしわたしがあちら側だった時のことを考えたんです。二人を守る能力を見せて、そ  
ちらに専念している以上、向こう側からしたら先に無防備な士さんを攻撃しようと思う  
のが当然です」

「お前……今日初めて戦ったとは思えないくらいに飲み込みが良いな」

「そうですかね? お役に立てたのなら嬉しいです」



そう言つて無邪気に頬笑みを浮かべるマシユから、士は直視出来ないと言つた様子で目をそらす。

「まあ、俺一人でも大丈夫だったが……」

そして照れ隠しのように言つたその言葉は既にマシユには照れ隠しだと気づかれているので、マシユは更に笑顔になつていた。

「あー、そう言えば。お前、なんて言う名前なんだ？」

耐えきれなくなつたのか、士は話題を変えるようにオルガマリーに質問を書いする。

「……自己紹介が遅れました。私はオルガマリー・アナムスフィア。人理継続保障機関の協力を感謝します。改めましてよろしく。仮面ライダー」

「門矢士だ。さすがに仮面ライダーという呼び方はしつくり来ないから変えてくれ」

「それじゃあ門矢、よろしく。ところで、さつきはありがとう。貴方の判断が無ければ、今頃私はここにいなかったかも知れませんが」

「よせ。お前がいないと今後マスターが困るかもしれないと思つただけだ。それに、さつきの状況判断は的確だった。ま、俺ほどではないがな」

そう言つて不敵に笑う士を見て、リツカとマシユは顔を見合わせ笑う。戦場での異常事態が続いてると思えないほど、穏やかな空気が流れていた。

「おうおう、戦場だと言うのに呑気そうじゃねえか」

突如声をかけられ、一同動揺する。いち早く声の方角に目を向けたリツカが見たものは、フードを被った杖を持つ男であった。

「貴方は一体……?」

「フオウ?」

「オレはキャスター。この聖杯戦争に呼ばれた七騎のうちの一騎だ」

そう自己紹介を終えた彼の様子を見て、マシユは驚きを隠せないと言った表情をする。

「先輩! あれは、正常なサーヴァントです!」

「おうとも、他の奴らは既に吞まれちまったが、オレはまだだ。一人でひっそりと抵抗を続けてるってわけさ」

「……キャスター、我々カルデアと共闘しないかしら。見たところマスターも居ないようですし、目的は一致すると思うのだけれど」

オルガマリーが申し出た提案を聞いて、キャスターはその言葉を待っていたと言わんばかりの表情をする。

「そいつは悪くねえ。だが、オレは素性も知らない奴といきなり共闘するつてのはあまり好きじゃなくてね。特にそのライダーからはあまり良くない気配がするからな」

「俺か。相変わらず、随分嫌われたものだな。マスター、こんな奴と共闘する義理はない。こんな事件、俺が一人で片付けてやる」

暗に信用ならないと言われた士は、自嘲気味に笑いながらキャスターを挑発する。その場に緊張した空気が流れる中、キャスターは埒が明かないとばかりに切り出す。

「その言い方——どうやら、ようやく役者が揃ったらしいな。とりあえず手合わせと行こうぜ、ライダー。アンタの判断は実際に戦つてするさ」

挑発を受けて、臨戦態勢に入るキャスター。それを見た士はやれやれとため息をつきながらバックルとカードを取り出す。

「そういう事だマスター。とりあえず、戦闘するが良いな？」

「仕方ないかな……それにしても本当に誤解されやすいんだ……」

「それで共闘の可能性があるというのならやむを得ません。カドヤ、お願い出来るかしら」

「血の気の多い奴はこれだから困る。——まあ、少し遊ぼうか。変身！」

KAMEN RIDE

DECADE

「サーヴァント、キャスター。オレは割と手強いぜ？」

そうして、二騎のサーヴァントの戦いが始まるのだった。

次回、Fate/Destroyed Order

「アンタの手数、どんだけあるんだ？」

「俺、参上ってな」

「お次は龍だ。倒せるかな？」

「■■■■——！！」

「そろそろ終わりにしようか、狂戦士！」

「仮面ライダーは負けません。私達が信じる限り」

第3話 「破壊された聖杯戦争」

全てを破壊し、全てを救え！

### 第三話 「破壊された聖杯戦争」

「さて、魔術師相手ならこれだな。キャスター、吸血鬼退治は得意か？」

そう言つてデイケイドは一枚のカードを取り出し、白いベルトに挿入する。

K A M E N R I D E

K I V A

カードが読み込まれると同時にデイケイドの姿が、蝙蝠をかたどつたような鎧を身にまとつた姿に変わる。キャスターは驚いた様子を見せながら空間に文字のようなものを綴り始める。

「いきなり姿を変えてくるか。ところで質問の答えだが……イエスだ。オレも地元じゃそれなりに名の通つた英雄でね。怪物退治はお手の物つてな！」

そう言うやいなや、空間に刻まれた文字のようなものより炎が放たれる。デイケイドは自らの身に降り掛かる火の粉を躲しながらキャスターとの距離を詰めていく。

「させるかよ。そらー！」

「くっ!？」

「そこだ、食らつてきな」

キャスターが杖をふるうと、デイケイドの足元から火柱が上がる。咄嗟に後ろに跳躍して回避するものの、その瞬間に生まれた隙をキャスターは逃さない。追撃するかのよう放たれた火球は、デイケイドの体に直撃した。

「ぐっ……なかなかやるな。なら、遠距離戦はどうだ？」

デイケイドキバは体勢を立て直しつつ一枚のカードをホルダーより取り出し、間髪入れずベルトに挿入する。

FORM RIDE

KIVA BASSHA

再びデイケイドの姿が変わるが、先程とは違い大きな変化ではなくその変化は、瞳と鎧の一部が緑色に変わる程度であった。だが、重要なのはその姿の変化ではない。デイケイドキバの手元には新たに緑色の銃が現れていた。有機的なデザインのその銃をみて、キャスターは興味深そうな声を上げる。

「へえ……銃とは考えたな。だがそれでオレの炎に敵うかな？」

「そいつはやってみてからのお楽しみってやつだろうさ！ ハア！」

二人は同時に構え、攻撃を放ち合う。

キャスターは知らない。その銃はただの銃ではない。その銃口から放たれるのは

魚人の力を宿した弾丸。つまるところバツシャーマグナムは水鉄砲である。

「なっ、水か!」

「ご名答。炎には水、ちようどいいだろ?」

キヤスターが知らなかったのもあつてか、放たれた弾アキラバレット丸は火球の数を上回り、一部がキヤスターの元に届き炸裂する。

「なかなかいい攻撃じゃねえか! だが、そっちが水で来るつて言うならこっちは消されないだけの炎を放たせてもらおうか」

キヤスターがそう言うと、彼の周りに石が浮かび上がり文字列を刻んでいく。

「不味いわね……あの長さ、相当な力のルーン魔術が来るわよ」

「士さん! でかいのが来るみたい!」

「なら、こっちも行かせてもらおうか」

リツカの言葉を受けてデイケイドキバはライドブツカーから黄色のカードを一枚取り出す。

「さあ、大仕掛けだ! 存分に味わってきな!」

「そう簡単に行かせるか!」

キヤスターがその身長のおよそ3倍はあろうという火球を放つのに合わせて、デイケイドキバもカードを読み込ませる。

FINAL ATTACK RIDE

K I K I K I K I V A

音声が読み上げられた直後、辺りが暗闇に染めあげられた。デイケイドキバの足下一帯には水が貼られており、半月が水面に映って揺らいでいる。それはさながら炎上都市に湖ができたようである。

「バツシャー・アクアトルネード、これなら行けるはず……！ つてあれ……？」

展開されたアクアフィールドを見ながら思わずみずからの手を握るリツカ。しかしどこか違和感を感じたのか、握ったり解いたりを繰り返している。——その間に、デイケイドキバの持つ魔海銃バツシャーマズナムが高速で回転し、水を巻き上げて水流の竜巻を起こす。そして、巻き上げられた水は一点に収束し、弾丸となる。掛け声と共に水弾は放たれ、炎に向かつていく。それに目を奪われのか、リツカはさつき感じた違和感を忘却して二人の戦いに視線を戻す。

「オレの炎とアンタの水。力比べと行こうじゃねえか！」

激突する炎と水。サイズが大きいこともあって、ぶつかった時の衝撃も並大抵のものでは無い。

「なんて力なの……これが英霊サイヴァント同士の戦いなのかね」

「フオウさん、わたし、これからこの戦いについていけるんでしょうか……」



「フオウフオウ……フオーウ！」

「恐らく励ましてくれてるんですね……ありがとうございます」

「フオフオウ！」

その戦いの激しさに見物者ギャラリも思い思いに感想を零す。ただ一人——藤丸リツカを除いて。彼女だけは、憧れの眼差しで戦いを無言で眺めていた。

そして、炎と水はお互い一步も譲ることなく対消滅に至る。

「相打ちか……なかなかやるじゃねえか！ これはますます気が抜けねえな」

「それはこっちのセリフだ。さて、これならどうだ？」

そう言いながらデイケイドキバはノータイムでカードを取り出しベルトに読み込ませる。手馴れてるが故の芸当だ。

KAMEN RIDE

RYUKI

再びデイケイドの姿が変わり、現れたのは龍の兜を纏った騎兵。すなわち、仮面ライダー龍騎である。

「お次は龍だ。倒せるかな？」

粋だろう？　と言わんばかりにそう言い放ちながら連続でカードをスキャンする

デイケイド龍騎。

ATTACK RIDE  
STRIKE VENT

「さっきのお返しだ、受け取れ！」

間髪開けず、手に装備された龍の籠ガクトレット手から龍炎が如き豪火がキャスターに向けて放たれる。

「何?！」

対するキャスターも少し動揺しながらも炎を放ち対抗する。しかし、短時間で放てる火力には限界があり、デイケイド龍騎の炎を相殺することが出来ずにダメージを受けてしまう。

「どうだ、少しは堪えたんじゃないか?」

「へ、なかなか良い火力だったぜ。炎には炎、なかなか粋なことをするじゃねえか!」

「伊達に『世界の破壊者』だなんて呼ばれていないんでな。さて、次はこれだ」

そう言つて再びカードを取り出しバックルに投げ入れ、片手で閉じる。全く下を見ることなくカードを投げ入れる様は相当な慣れを感じさせるものであり、キャスターもさらに警戒を強め、牽制の炎を放つ。

KAMEN  
RIDE  
DEN—O

しかし、放った炎は読み込まれたカードから現れた鎧——オーラアーマーによって弾かれる。その時に生じた煙が晴れると、そこには桃を割ったような顔のライダー——電王の姿があつた。

「せっかくだからこれも使つておくか。こんな時でもないを使うこともないだろう」

ATTACK RIDE

ORE SANJOU!

「俺、参上つてな」

胸に右親指を当てて膝を曲げながらその手を後ろに伸ばし、左手を真つ直ぐ前に伸ばしてポーズをとるディケイド電王。

「藤丸、あのカードにはどんな力があるの？」

ポーズをとつた後も何も起きないことを不思議に思つたのか、オルガマリーはリツカに問う。

「『俺、参上!』つてポーズを決めるだけです。あれ以上は何も無いです……」

「フオウフオ!?!」

「マジで。あれだけです」

「ええ……」

リツカは頭を抱えながら答える。先程まで戦いで熱くなっていた空気は完全に凍りついていた。訳の分からなさにフリーズするマシユ、呆れた表情のフォウ、困惑を隠しきれないオルガマリィ。

そして、戦いの相手だったキャスターはと言うと。

「は、なんだそれ！ なかなかカツコイイポーズじゃねえか！」

大爆笑であった。決めポーズが彼のセンスに刺さったのか、気に入ったようである。

「そうか……？ それにしても、使い道がないカードだと思ってたが、こういう使い方もあるんだな……」

当のデイケイド電王は勉強になったと言わんばかりの様子であった。

「何だか和んじまったが、オレとアンタは敵同士。とりあえず再開と行こうか。今度はオレも、接近戦で行かせてもらおうかねえ！」

「ふっ、面白い。その接近戦、桃の鬼に通じるかな？」

キャスターは自らの体に向けてルーン魔術を使用し、杖をまるで槍のように構え始める。一方のデイケイド電王もソードモードのデンガツシャーを肩にあてて構える。

「アンタの手数、どんだけあるんだ？」

「俺に勝てたら自然とわかる。勝てたらの話だな！」

「おもしれえ、やってやる……………とやりたい所なんだがそうも行かなくなったみたいだな」

今にも激突といった様子だったが、キャスターは近づくものの気配を察知し戦闘を中断する。

「この気配……………さっきのアサシンと良く似ているな」

「どうやら見つかっちゃったらしい。堕<sup>ア</sup>ちた騎<sup>イ</sup>士<sup>ツ</sup>王の手先が来るぞ——それも二騎だ」

「少し勝負はお預けらしいな」

「ああ。オレが片方倒す。アンタらにはもう片方を任せるぜ」

そう言いながら獰猛な目を光らせる

「良いだろう。マシユ、お前もこい！」

「……………はい！ 行ってきますね、先輩」

「……………うん、行ってらっしゃい」

ディケイド電王は物陰に隠れてみているマシユを呼び出し、やって来る敵に備える。

「お嬢ちゃん、アンタはとにかく防御に徹しな。その盾は守るための力だ。あのライ

ダーに降り注ぐ攻撃から守ってやれ。連携が上手く取れたらもつと上手く戦えるはず

だぜ？」

「……………やってみます！」

そうして、二騎の堕ちた英霊が現れる。

「キヤスター……タオス……ソシテスカサハ二……」

「■■■■■■■■——!!」

片や、青髪でキヤスターに似た風貌の槍兵。片や、二メートルを優に超える筋骨隆々の巨人。どちらも黒いオーラを身にまとっており、その表情は伺えなくなっている。

「よう、随分落ちぶれたもんだな。オレ。てめえにはオレが引導を渡してやるよ」

「ならこつちはこの巨人相手つてわけか。キヤスター、なんか知つてることがあるなら話せ。そつちの方が手つ取り早い！」

巨人の攻撃をマシユが受け止める中、デイケイド電王は槍兵の槍を凌ぐキヤスターに問う。もちろんその間も敵の攻撃が緩められることは無く、キヤスターは槍を杖でいなしながら問いに答えていく。

「そいつはバーサーカー、真名はヘラクレス。一撃一撃が重いが、バーサーカーな上に黒化されてる分技量は劣る。とは言つても、1発で即死レベルだ。気を抜くなよ？ あと、宝具のせいで一度受けた攻撃は基本的に無効化されるし、あと——多分六度は蘇生する。アンタの手数なら何とかなるかもしれないねえが、やばそうなら時間を稼いで貰えりゃあこいつの後にオレが何とかしてやるさ」

「だいたいわかった。とりあえず何度か倒すしかないってことだろ！」

マシユの体勢が崩れたのを見たデイケイド電王は手に構えたデンガツシャーを用いてバーサーカーの持つ巨大な斧剣を受け止め、弾く。

「そういうことだ！」

一方でキャスターも槍兵のくり出した一突きを、華麗に交わしていた。

そして、会話を終えたデイケイド電王とキャスターは本格的な戦闘に突入する。

「(マスター、そういう事だから派手に行くが——いいな?)」

「(頭の中に直接!? えーと、とりあえずいいよ、士さん。やつちやつて!)」

「さて、『最初から最後までクライマックス』って奴だ！」

そう言いながらデイケイド電王は黄色のカードをバツクルの中に投げ込む。

FINAL ATTACK RIDE

DE DE DE DEN—O

「はあ！」

デンガツシャーの戦闘が分離し、遠隔操作に切り替わる。デイケイド電王の振りに合わせ跳ぶブレードはバーサーカーの体をズタズタに切り裂いた。

本来の力の持ち主であれば、「俺の必殺技PART2」とでも言いそうなその技により、バーサーカーの命は1つ削られる。

「本来ならこれで終わりなはずだが——」

「くっ、きやあー！」  
「マシユ！」  
「大丈夫です、でも士さんが！」

バーサーカーの体から大量の熱が放出され、1度死んだはずの彼は蘇生する。そして、蘇生しながら斧剣を構えて突撃を開始した。マシユが一撃を受け止めるものの、用意ができていなかった為に弾き飛ばされる。

「ちっ、思ったより早い！」

デイケイド電王は焦りながらカードを取り出し読み込ませる。

ATTACK RIDE  
NAKERUDE

バーサーカーが振り下ろした斧剣はデイケイド電王に直撃することは無く、彼が新たに手に持った斧——デンガツシャーのアックスモードによって受け止められていた。

「泣けるで！——って、最早意味すら通ってないじゃねえか！」

自分でいいながら自分でツツコミを入れる。何よりも関西人らしいことをしているデイケイド電王の姿は黄色い顔の斧を持つ戦士に変わっていた。電王アックスフォームである。



先程、リツカがセリフを言うだけだと言ったカードであるが、正確にはそんなことは無い。姿の切り替えも可能なのである。とはいえ、「フォームライド」と言うセリフを言わない姿の変化用のカードがある以上、本当に不必要なカードであることに違いはないのだが。

「まあいい。直ぐに終わらせてやる！」

FINAL ATTACK RIDE  
DE DE DE DEN—O

再び電王のファイナルアタックライドカードをスキャンし、手に持ったデンガツシャーを上高く投げる。そして、ジャンプし回転する斧を掴み、バーサーカーに向かって振り下ろす。アックスフォームの必殺技、ダイナミックチョップだ。斧の一撃はバーサーカーを頭から貫き、再びその命のストックを減らすことに成功した。

「そら、まだまだ行くぞ！」

ATTACK RIDE  
KOTAEWA KIITE NAI

「答えは聞いてない——つて、話せないんだから当然だな」

龍のような顔にガンモードのデンガツシャーを構えたデイケイド電王——ガンフォームは軽くステップを踏みながらバーサーカーを指さして挑発を行う。無論、

フォームチェンジのための行為である。

FINAL ATTACK RIDE

DE DE DE DEN—O

「体勢を立て直す前にもう一発だ！」

■■■■——！

「つ——させません！」

ステップをしながらカードをスキャンしていたらしく、既にディケイド電王は次の必殺技のモーションに移っている。蘇生を終えたバーサーカーは回避を試みるも、マシユのシールドバツシユにより回避行動に移れない。そして、両手で構えたデンガツシャ—と両肩から供給されたエネルギーによる1つの大きな弾丸は、バーサーカーの命をさらに一つ削るのだった。

「キャスターの話ならあと三つって所だが……どうやらまだ蘇りそうだな」

再び蘇生を始めたバーサーカーを見ながら新たなカードを使用するディケイド電王。既に三つの大技を出したというのに、彼の手数にはまだ限界が見えない。

ATTACK RIDE

BOKUNI TURARETE MIRU?

(流石士。……これなら行ける！)

リツカは内心でそんなことを考える。仮面ライダーの力をよく知る彼女は、現状を見て勝利への確信を抱いていた。しかし、そんな彼女に異変が起きる。

(あれ……おかしいな。なんか眠くなって来たような……)

彼女の意識が遠のき始めたことに気づくものは誰もいない。若い頃の自分が堕ちたものと闘うキャスター、神話の英雄との戦いに精一杯のライダーとシルダー、そして置かれた状況に精神的に限界を迎えつつある上司、誰もが気づかない。——もしかしたら、傍らで彼女を不安げに見つめる白い美しい獣——フォウだけは気づいているのかもしれないが、それを伝えることが出来ない以上、同じことである。

「僕に釣られてみる？ —— つてもういい加減飽きてきたな。手早くやるぞ」

青い仮面を見にまとい、うさぎの様な亀のような姿に身を変えたデイケイド電王は自らの手を一度叩きパンパンと音を鳴らした後、釣竿のようになったデンガツシャーを構えながらカードを手にとった。

FINAL ATTACK RIDE

DE DE DE DEN—O

四度、電王のファイナルアタックライドが発動される。報酬されたエネルギーはデイケイド電王の足元とデンガツシャーに集中していく。

「マシユ、一瞬でいい！ 奴を受け止めろ！」



「ひっ！ 聞いた通りしぶといわね……本当に勝てるのかしら……」

「仮面ライダーは負けません、私達が信じる限り」

リツカは眠気により虚ろな目をしつつも、この戦いを見逃してたまるかと思を離さなかった。大地を揺らす咆哮により弱気になったオルガマリーの心配にも一切の躊躇なく断言する。仮面ライダーは負けないと。ヒーローを信じる者がいる限り、最後には必ず勝利を納めるのだと。

「流石にそろそろ面倒になってきたな。もっと大きい一撃を入れてみた方が良いか？」

「そんなものがあるんですか……？」

「まだ俺は本来の実力の半分も発揮していない。サーヴァントやらになったせいでもかなり制限されてはいるがな」

「わたしもあまり長くは持ちません……早めに終わる手があるならそれで行きましょう！」

マシユの返答を聞いたデイケイドは新たなカードを二枚取り出す。

「決まりだな、変身」

KAMEN  
RIDE

AGITO



る。

とはいえ、力を蓄えるなどというのをみすみす見逃すバーサーカーでは無い。その隙を何とか突こうと距離を詰めようとする。

「(っ)は、通さない……!」

しかし、その前にはマシユ盾・キリエ英ライト霊が立ち塞がる。これまでの戦闘で、バーサーカーの動きを観察してきた彼女は、彼の攻撃を受け止め続けることができるようになっていた。

「よくやったマシユ! 行くぞ!」

そして、チャージが完了し、ディケイドアギトが飛び上がる。両足に蓄えられた力は、両足による飛び蹴りで解き放たれる。

「はあああ!!!」

アギトトリニティフォームの必殺技、ライダーシュートである。その力は一度の命の限度を超え、残されたバーサーカーの命全てを刈り取るのだった。

「■■■■」

「やった……の?」

全ての命を使い果たした狂戦士——ヘハララのレ栄ス光の霊基が消失していく。去り際の彼は、まるで呪いから解放されたが如く穏やかな表情をしていた——ようにマシユには見

えた。黒いオーラによって顔を伺えないものの、マシユにはそう見えたのだ。

「やりました……！ やりましたよ、士さん！」

「ふっ、なかなか骨が折れる相手だったな。それに、向こうも終わったらしい」

マシユと話しながら、元来の姿に戻るディケイド。そして彼が言った通り、キヤスターの戦いもほぼ同時に終わっていた。無論、キヤスターの勝利である。いくら彼がキヤスターであり、相手が槍を持つていようとも、堕ちて技量の低下した若き日の自身に負けることは無かった。

「おう、お互いお疲れさん。まさか、あのバーサーカーを倒しちまうとはねえ……どうやら本気でやり手らしいな、アンタ」

「御託はいい。まだやるってなら相手になってやる」

ディケイドは懐のライドブツカーをソードモードに切り替え、戦闘態勢をとる。マシユもそれに釣られて縦を構え、攻撃に備えた。

「やめとけやめとけ。アンタらは準備出来てるかもしれねえが、マスターはどうだろうな？」

キヤスターの言葉を怪訝に思った二人が後ろを振り向いたその瞬間。岩陰に隠れていたリツカが、意識を失い地面に倒れ伏した。

「っ!?! 先輩!?!」



「おい、マスター！」

「藤丸!？」

「フオウフオ!？」

三人と一匹が突如起きた事態に驚きに支配される中、キャスターはただ一人冷静に告げる。

「当然だ——ライダー、アンタはただのカルデア式サーヴァントじゃないからな」

だがしかし、その言葉をちゃんと聞いたものは誰一人として居なかった。誰もが昏倒した藤丸リツカを前に混乱していた。

「先輩、しっかりしてください、先輩!!」

次回、Fate／Destroyed Order

「アンタは七騎目だよ、ライダー」

「士さん……?？」

「着いてこれるか?」

「貴様も贗作使いか、面白い！」

「どこから撃ってるの!？」

「せっかくだから見せてやる、歩くライダー凶鑑ってやつをな！」

第四話 「贗作者VS破壊者」  
全てを破壊し、全てを救え！

## 第四話 「贗作者対破壊者」

「ここだったら多分安全だ。見張りもしておいてやるからゆつくり休ませてやれ」

突然倒れた藤丸リツカ。唯一のマスターである彼女を置いて特異点攻略を進めることも出来ないため、一行は現地で出会ったサーヴァントであるキャスターの案内で廃ビルに身を隠すことになった。

「キャスター、アナタの好意には感謝します。ですがどうしてそこまで？　アナタの目的は結局何なんですか？」

その都合の良い事態を訝しんでオルガマリーがカルデアトップとしての固い口調でキャスターに問いかける。先程サーヴァント同士の戦いを目撃し、生身でその驚異を感じたのもあつてか、彼女の手は僅かに震えていた。

「オルガマリー、そう怯える必要はないだろう。乱入で有耶無耶になったが、つまるところ合格つてことで良いんだろ、キャスター」

「ま、そういうことだ。ライダー、疑って悪かったな。アンタ、生きにくいだろ、そんなもん持つてたら」

「まあ、ずっとこれだからな。流石に慣れる。ところでキャスター。お前——どこまで

知ってる？」

見かねた士が間に入り、やり取りを行うがその様子は腹の探り合いにしか見えない。「先輩を奥で寝かせてきました。——もしかして、お取り込み中でしたか？」

その時、丁度よく奥の部屋にリツカを寝かせてきたマシユが戻ってきた。

「そんなことは無いぜ。ライダー、さっきの質問への答えだが、マスターの嬢ちゃん起きてからで良いか？ オレの持つてる情報をとりあえず一通り教えてやるよ。会った時にも言った通り、オレもこの状況は好ましくねえからな。何とか解決したいとは思ってるのさ」

そう言つて少し口元を緩めるキャスター。彼の目に悪意はなく、ずっと戦い続きだったカルデア一行はここでようやく安心して一息つけるのだった。

「——以上が、これまでの状況の報告よ。なにか質問はあるかしら？」

『特にありません。それにしても、所長が居てくれてほんとに助かりました。ボク以上の権限を持つスタッフは全滅。今後ボクが所長の役割を代行してカルデアを仕切る事になるのか……とか思つてたりしたので』

リツカを目覚めるのを待つ間に、オルガマリーは廃ビルの一角でリツカの持つていた通信機を用いてカルデアと連絡を取っていた。応答したDr. ロマンと話す中でオル

ガマリーは事態が相当に危ういものであることを再認識する。

「わたしも本来ならアナタがトツプだなんて認めたくないわよ！ でもアナタしか居ないならしょうがないじゃない。わたしが帰るまでカルデアをなんとか維持してちょうだい。それと、もし万が一わたしに——」

『おつと所長、それ以上はなしですよ。——キミの事だから恐ろくかなり無理をしているんだらう。でもそんな弱音を今は吐かないでくれ。どちらにしろ、その特異点をなんとか修復しないと人類に未来はない。だから、どうか無事に帰ってきてくれよ、マリー』  
弱音を吐きかけるオルガマリーを静止して、ロマニは彼女を激励する。

「——そうね。幸いサーヴァントの召喚や、協力の取り付けにも成功した。なんとかなる可能性は十分ある。弱音を吐いている場合では無かったわね」

『その意気さ』

「——ロマニ・アーキマン。あなたをカルデアの所長代理として任命します。所長が帰還するまで、どうかカルデアを、人類の砦を守るように」

サーヴァントの闘いで身の危険を身近に感じたからか、はたまたヒーローという概念を知ったからか。どちらにせよ、1日前の彼女からは出ないであろう言葉を聴いたロマニは驚いたように一瞬押し黙り、それを悟られないようにおどけてみせる。

『やれやれ、人使いの荒い所長だなあ。まあそれはそれとして、確かに拝命しました。ど

うか無事にお戻り下さい、所長』

とは言え、真剣に発せられた言葉には誠意を見せる。ロマニの声色がそれを物語っていた。

「とりあえずはできる範囲で良いから観測を続けて何かあれば随時報告してちょうだい。それと、マシユと藤丸のバイタルチェックもしておいて。あの二人は特異点攻略の要よ。万が一が起きないように優先的に見ておいて」

『分かりました。とりあえずこちらもまだ收拾が着き切っていないので一度通信を切ります。マシユとリツカちゃん、それと仮面ライダーによるしくお願います』

「そつちも気をつけて。このわたしが頼んだのだから、完璧にこなすこと」

『はい。それではまた後ほど』

そうして通話が終わる。二人とも聡明であり、お互いの口にしなかつたこともある程度推測がついていただろう。だが、そこには言及しない。相手の意地も気遣いも分かつた上で口に出さない方が良いと二人は共に判断したのだ。

「所長！ 先輩が目を覚ましました！」

通話が終わるや否やというタイミングで、マシユがオルガマリーの元へやってくる。リツカの覚醒を伝える彼女はこれまで見たことの無いような喜びの表情をしており、オルガマリーは彼女の急な成長に驚く。

「そう、分かったわ。すぐに行きます」

「士さんにも声をかけてきますね！」

「ええ。先に行つてゐるわ」

駆けて言つた彼女を見てオルガマリーは独り言を零す。

「わたしも彼女も、一日もしない間に変えられてしまったのかもしれないわね」

その表情は明るく、炎が広がる特異点には似つかわしくないものだった。

「ごめんなさい、心配かけちゃつたよね」

「ええ、全くよ。おかげで足止めを食らつちやつたわ。わたしたちには時間が無いんだから」

「所長、何もそんな言い方をされなくても——」

オルガマリーから発せられた言葉が刺々しかったこともあり、マシユは思わず反駁するが、それを遮るようにオルガマリーは語る。

「マシユ。意見をストレートに言えるようになったのは良い傾向だけど、人の話は最後まで聞くことよ。——だから藤丸、このミスは貴方の頑張りを取り返しなさい。貴方はここにおける唯一のマスター。挽回のチャンスはいくらでもあるわ」

「所長……はい、藤丸リツカ、未熟ながら世界を救うために頑張ります！」

憑き物が落ちたかのように冷静な言葉で鼓舞ができるようになった所長を見てリツカも勢いよく返事を返す。

「だからと言って気負いすぎないように！ さつきみたいに少しでも身体が可笑しいなと思つたら直ぐにわたしに報告すること。分かった？」

「い、イエツサー！」

指揮官としての威厳を發揮した所長に対して不自然にかしこまつたりツカを見て、そのやり取りを見ていたマシユの口元にも自然と笑みが浮かぶ。

「あー、そろそろ良いか？ マスターの嬢ちゃんが目覚めたんだろ？」

「フオウ!?」

「キャスターさん!？」

フオウが驚いた様子で鳴いた方を見るといつの間にかそこにはキャスターが現れていた。

「おいおい、そんなに驚くことねーだろ。ただの霊体化だ。ずっとここにいたさ」

「サーヴァントの霊体化……話には聞いていましたがそこまで気配を消せるのね。これは想定以上だわ」

「だろうな？」

「きやつ!？」



オルガマリーが驚きの表情を浮かべながら後ろを向くと、そこには土の姿があった。流石のオルガマリーも二度目は想定外であつたらしく、驚きのまま尻もちを着いてしまふ。

「門矢……アナタつてサーヴァントは……!」

「悪い悪い、まさかそこまで驚くとは思つてなかつた」

「あー、そろそろ始めていいか?」

状況を見かねたキャストが話を切り出す様子を見てオルガマリーは顔を赤くしながら立ち上がり、仕切り直しと言わんばかりに咳をした。

「——見苦しい様子でごめんなさい。じゃあ、始めましょうか」

「おう。じゃあまずはお互いの状況確認と行こうぜ。まずは……カルデアだったか?」

そつちの状況を聞かせてくれ」

「所長、ここはわたしが説明します」

「いいでしょう。キリエライト、アナタに任せます。説明後に足りない情報はわたしの方から補足しましょう」

そして、マシユによるカルデアの状況報告が行われた。カルデアの目的、発生したトラブル、特異点突入後から現在までの経緯。それと一行のプロフィール。それらの情報を一通りキャストに伝える。

「なるほどねえ、『特異点』ときたか。ま、そつちの事情は理解した。オレもその解決に力を貸してやるよ。という訳でそのマスターと仮契約と行きたい訳なんだが、さつきの様子を見るにそんな簡単に仮契約して良いものか悩みどころだよな」

「そう言えばキャスター、藤丸が倒れた原因についてアナタ何か心当たりがあるようだったけど、知っていることがあるのなら教えて貰えないかしら」

オルガマリーはキャスターが、リツカが倒れる直前に、マスターの状態が悪くなっていることを言い当てていたことを思い出し、彼に問いかける。

「そうだな、それにはこの聖杯戦争の異常性について説明するところから始めないといけない。ちよつと長くなるか良いか？」

「構わない、聞かせて欲しい。私も私の身体に何が起きてるか気になるし、それにこんな地獄のような光景が出来てしまった理由を知らないといけないと思う」

リツカの決意を秘めたような目を見て、キャスターも感じている所があったのか、姿勢を正して話を始める。

「じゃあ、この狂った聖杯戦争の話を始めろぜ。——その前に、オレの名前はクー・フリーン。かつては“クランの猛犬”なんて呼ばれたが、今は魔術師キャスターのクラスで現界したしがない英サイヴァント霊だ」

そして、真名を明かしたキャスターことクー・フリーンは語り始める。本来の歴史か

ら遙かに歪んだ聖杯戦争の記録を。

「——つてな感じで、マスターは全員どこかに消え、オレ以外のサーヴァントは全滅し、さつき見たような、最早英霊としての誇りすら失った姿になっちまったわけだ。オレはその事態を解決するためにこうして動いてたんだが、さすがに多勢に無勢でね。アンタらが来てくれて助かったつてのが正直なところだ」

「なるほど、状況はだいたい把握しました。少し質問があるのだけど、良いかしら？」

「いいぜ、と言いたいところだがその質問は聞くまでもないな。アンタが聞きたいのは、<sup>ライダー</sup>騎兵の話が一切出てこなかったことだろう、所長さん？」

オルガマリーの質問にキャスターは予想通りという様子で話を続ける。まるでその質問が来るのが分かっており、聞かれるのを待っていたと言わんばかりの様子で。

「ええ、話が早くて助かります。一体どういうことなの？ 本来聖杯戦争は七騎で行うものでしょう？ エクストラクラスが召喚されたという話もなかった以上、元々この聖杯戦争は六騎しかサーヴァントが存在しなかったということにならないかしら？」

「アンタの察しの通りさ。この聖杯戦争にはライダーが存在しなかった。もちろん代わりの例、<sup>エクストラクラス</sup>外なんてのが召喚されることもなかったぜ。ついきつきまではな」

「なるほど、そういう事か。大体わかった」

キャスターの含みのある言い方に、これまで口を挟むことの無かった士が事態を把握したと言わんばかりの口ぶりで告げる。その発言はリツカの目を輝かせていたのだが、それは彼女がただ仮面ライダーが好きだからである。

「ああ、そうだ。アンタは七騎目だよ、ライダー」

キャスターが告げた言葉でリツカを除く全員が事態を把握したという様子で考え込む仕事を始める。聖杯戦争に対する知識が薄い上に士の発言で、上の空状態だったリツカだけが全く自体を呑み込めていなかった。

「……なるほど、そういう事ね！ だから藤丸はさつき倒れることになった、確かにそういう状態なら納得が行く……」

「詰まるところさつきの召喚はカルデア式ではなかった……だからこそ士さんが召喚されたのですね。納得しました」

「フオウ、フオウフオウ！」

「え、ちよつと待って。これももしかして私だけ分かってない感じ？ フオウ君すら分かってるのに私だけが分かってない感じだよね？」

「どうやらそうらしいな、嬢ちゃん。まあ簡単に言うけど、そのライダーはアンタらカルデアのシステムじゃなくて聖杯戦争の召喚の一環で喚ばれたってことだ」

「あ——、なるほどそういう事ね？ わかった、私分かった」

明らかに分かっていないだろうが、恥ずかしさからそれが言えないのか、リツカはわざとらしくごまかしにかかる。それは誰の目から見ても明らかで、隠すのが下手という次元ではなかった。

「まあ、詰まるところ、キミと門矢の契約は直接結ばれているから、カルデア式と違って短時間に魔力を使いすぎると、身体に送り込む魔力が間に合わなくなるってことよ。令呪から通じてるパスのおかげで魔力自体はカルデアから供給できるけど、カルデア式よりも魔力を流すのに手間がかかるってことね」

それを察して、気を遣ったオルガマリーが（彼女なりに）分かりやすく説明を行ったが、残念ながらリツカには理解が追いつかなかった。墓穴を掘ることを恐れ始めた彼女は最早コクコクと頷くだけの機械になってしまっている。

「で、結局オレは仮契約出来るのかね？ 所長さん、アンタシステムに詳しいみたいだし、判断頼むわ」

「結論から言うとうと問題ありません。アナタとの仮契約はカルデア式で結べば特に藤丸に負担が行くことも無く、魔力供給もある程度は行えるでしょう」

「お、ラツキー。それじゃ早速頼むぜ、リツカ」

「あ、うん。——所長、仮契約つてのをやれば良いんですか？」

「そう言えばまだ、アナタはちゃんとした契約を落ち着いてした経験すらなかったわね。」

手順は教えてあげるからその通りにやりなさい」

「じゃあ、仮契約の傍ら、ここに残ってる敵対勢力についてオレが分かっている情報を教えるか。ま、バーサーカーほど細かく知ってる訳でもないんだがな、無いよりはマシだろうさ」

所長の手解きを受け、リツカは無事キャスターであるクー・フリーンと仮契約を結ぶことに成功した。そして、情報交換に加えて、十分な休息と言えるかは怪しいが、行動を再会できる程度に回復を行えたので、時は急げという事で一行は廃ビルを後にしていった。

「キャスターさん、さっきの話では残りの敵対サーヴァントは二騎、アーチャーとセイバーとの事でしたが、基本的には持ち場を動かないでしたよね？」

「ああ。セイバーは大聖杯に陣取ってやがるし、アーチャーはセイバーの守護者気取りで常に傍らに控えてやがる。こんな事態になってからヤツらが動いた所は見たことがない」

「ならこのまま大聖杯に向かって進めば良いってことね。サーヴァントの奇襲がないのならじっくり作戦が立てられて助かるわ」

キャスターの言葉を信用する一行のメンバーは、周囲に敵性反応がないか位の警戒は

していたものの、少し和やかで気の抜けた雰囲気です。街を進んでいった。

「——何か来る！ その店の店に隠れる！」

「士さん……？」

そんな中一番後ろを歩いていた士が何かに気づいたかのように叫び、退避を勧める。

「逃げ！ ……間に合えよ！」

「フオウフオウ！」

フオウの呼び掛けもあり、慌ててリツカとオルガマリーを庇いながら壊れた店舗に向かうマッシュとキャスター。迫り来る大きな一撃に備えて士はカードを同時に三枚出し、順に読み込ませていく。

KAMEN RIDE

DECADE

KAMEN RIDE

BLADE

ATTACK RIDE

TIME

士の姿がデイクイドの姿に変化した後、ヘラクレスオオカブトに良く似た剣を持つ仮面ライダーの姿に変わる。運命と戦い勝利したライダー、仮面ライダー<sup>ブレイド</sup>剣である。そし

て、最後の一枚が読み込まれた後、目と鼻の先まで来ていたとてつもない勢いを持った剣が一時的にその場で停止した。

「何とか間に合ったか……だが、さすがにこの直撃を受ける訳には行かない」

ATTACK RIDE  
METAL

リツカ達が店内に入ったことを確認した後、追加でカードを一枚取り出し使用する  
デイケイドブレイド。

読み上げる音が鳴り響いた後、止まっていた剣がその動きを再開し、デイケイドブレイドの体に触れると同時に爆ぜた。

「くっ、やはり使っておいて正解だったな……」

爆風が晴れると、そこには銀色に硬化したデイケイドブレイドの姿があった。しかし、その姿は直ぐにデイケイド本来の物へと戻っていく。そして思わず膝を着いたデイケイドにリツカは思わず声をかける。

「土さん！」

「来るんじゃない……！ 相手は俺たちの場所を正確に把握しているらしい」

「何とか体制を建て直し変身したまま店内に転がり込むデイケイド。その様子には明らかな動揺が見られた。」



「アーチャーだな……アイツ、あんな形になっても目は落ちてないってことかよ！」

「あの攻撃、どこから撃ってるの!？」 全く見えなかったわよ?」

「アーチャー弓兵の中にはクラススキルで千里眼を持つてる奴がいる。ヤツも持ってた上に今もその能力は健在ってことだろうぜ。しかしアイツが動くとはな……」

「とにかく対策を考えましょう……! 先輩、何か案はありませんか?」

マシユは期待に満ちた目でリツカを見る。突如話を振られたリツカは混乱しながらも考え始めた。

「え、私? そうだな……士さん、タイム使ったのなら相手の大体の場所はわかった?」

「タイム? 藤丸、一体それは何なの?」

「タイムって言うのはさっき士さんが使ったカードの1枚で、周囲の時を一時的に操る効果があるんです。相手の攻撃が一時的に止まったのもあれのおかげです。結構負担のかかる技だから乱用は出来ないと思うんだけど……」

「確かに、やつ場所はだいたい把握したが……さすがに方角が限界だな」

「そっか……ならどうしよう——」

彼らが作戦を練っていると周囲で爆発音が起きた。アーチャーが再び攻撃を再開したのだ。それと時を同じくして、廃店舗にスケルトンが侵入してくる。

「……どうやら、のんびり話してる時間はないみたいだな!」

キャスターが炎を放ち、侵入してきたスケルトンを撃破するが、既にスケルトンが周囲を埋めつくしていた。

「マスター、どうする？」

「悩んでる時間はなさそうだね……士さん、アーチャーにタイマンで勝てる自信はある？」

「もちろんだ……と言いたいところだが、魔力の都合もあるから絶対とは言えないな」

「ディケイドはスケルトンをライドブツカーで切り裂いたあと手を払いながらそう述べる。」

「藤丸、門矢。魔力がどうしても必要なら令呪を使いなさい。それがあればさっきの戦闘以上に魔力を使っても倒れる心配はないわ」

「それなら、何とかしてやる！」

「士さん……よし、皆私にここを突破するアイデアがある！ 理由を説明する時間が無いから、今から言う通りに動いて欲しい！」

士の返事を聞いて、リツカは腹を括った。マスターとして、この場の英霊たちを指揮し、勝利に導くのだと決意をしたのである。

「よし、行くよ！ 皆手筈通りをお願いします！」

「はい、頑張ります!」

「任せな!」

合図とともに一斉に店を飛び出し展開する。マシユが盾を構え、その傍らにリツカが立ち、礼装で彼女をサポートする。キャスターとオルガマリーは魔術を用いて周囲のスケルトンを自陣に近づけないようにしていた。デイケイドは、再び緑ベカススフォームのクウガに姿を変え、先程の攻撃が放たれた方角をその超感覚を用いて探索していた。

「見つけた! 放つぞ!」

デイケイドクウガがアーチャーを目視し、攻撃を放った瞬間、アーチャー側からも一撃がこちらに向けて放たれていた。

「攻撃、確認しました! 持ちこたえてみせます……!」

その攻撃が放たれたのをマシユは正面から見据える。隣に立つリツカを、後ろで自分たちを守ってくれるオルガマリーやキャスターを守るために。

そして、攻撃が迫り、マシユの盾に至る瞬間。一瞬だが、光の壁が現れる。

「絶対に止めてみせます! やああ!」

その光の壁で放たれた剣の威力は減衰し、マシユの踏ん張りもあつて爆発を含め、盾で受け止めきることが出来た。

そして爆風の後、その場にはディケイドクウガを除く全員が健在であった。

「マシユ、良くやったわ！ 今のは……宝具の片鱗ね」

「わたしが……宝具を？」

「凄いよマシユ！ 今の光の壁、かつこよかったよ！」

「大したもんだぜ、嬢ちゃん。さて、後はライダーが上手くやつてくれるかだな」

時は少し遡り、店舗の中に戻る。

「結論から言つて、大事なのは土さんがアーチャーを見つけて、その場から離れられる前にアーチャーの元にたどり着くことだと思ふんだ」

「そんなことが出来るなら今すぐにももやつてるわよ、と言いたいところだけど。何か考えがあるみたいね。言ってみて」

「はい。アーチャーを見つけることはさっきのペガサスフォームでどうにかなると思うんだ。問題はその後。こっちがアーチャーを見つけることは、あつちにも見つけられる可能性が高い。だから、攻撃が一発確実に来ることになる。それをマシユに何とか受け止めてもらわないといけない。で、マシユに受けてもらうならスケルトンはキャスターと所長に対応してもらわないといけないんだ。マシユが守りに集中出来るように」

リツカは思いついた作戦を語り始める。無論、素人の考えた戦法だ。本来なら通用し

ないはずである。だが、こちらには異分子と、それに精通している人間がいる。それがカルデア側の唯一の勝ち目であった。

「なるほどな。でもよ、リツカ。結局のところアーチャーの元まで辿り着く方法がねえじゃねえか」

「士さんには高速移動系の力もあるはずなんだ。アーチャーの攻撃の爆風が拡がってる間にそのカードを使用して、二発目が放たれる前に向こうまで行ってもらおう、それなら何とかならないかな？」

「……どうやら悩んでる間は無さそうね。いいでしょう、その作戦で行くことにしましょう。門矢、アナタも構わないわね？」

「ああ、マスター。今度は倒れるなよ？」

「もちろん！　じゃあ——合図で出発しよう！」

そして、現在。高地から射撃していたアーチャーの目の前には、銀色のボデイに赤色の「Φ」を象ったような顔と、開いたような胸元のコアが印象的な仮面ライダーが居た。10秒間のみマツハ51にも達するスピードを発揮出来る仮面ライダーファイズアクセルフォーム、の姿を取ったデイケイドである。デイケイドファイズがアーチャーの前に姿を現すと、「TIME OUT」という電子音の流れ、デイケイドの姿へと戻る。そ

の姿を見た、アーチャーは何か気づいたように言葉をかける。

「どんな手段を使ったのかと思っただが、貴様、まさか……仮面ライダーか？」

「俺のことを知ってるとは、この世界では俺は本当に創作物らしい。だが、お前も相当な偽物だな？」

ディケイドは相手の口ぶりや、動作を見て何かを察したらしく挑発を行う。一方、挑発を受けたアーチャーもタダでは終わらない。ニヒルに笑いながら言葉を返す。

「ふっ、察しが良いな。貴様も贗作使いか、面白い。贗作者同士、力比べと行こう」

「贗作者か、確かに俺もそう言う口なのかもしれないな。だが、生憎と俺は破壊者だ。ちよっとお門違いって話だな」

「それは失礼。オレもかなり壊れていてね。そろそろ始めるとしようか。だが、オレの動きに貴様はついてこれるか？」

「ふっ、お前の方こそ俺に着いて来れるか？」

かくして、戦いの火蓋は切つて落とされる。手始めにカードを二枚取り出したディケイド。その二枚にはメタリックな赤色に水色の瞳が特徴的なライダーの姿が描かれている。

K A M E N    R I D E

K A B U T O

ATTACK RIDE

CLOCK UP

「くっ、そのライダーは！」

使用したカードを見て顔を歪めるアーチャー、その瞬間、デイケイドはデイケイドカブトへと姿を変え、そしてその姿を一瞬にして消す。

「動きが追えない……ぐっ、だが！ 投影、開始！」

トレース、オン

見えない敵からの攻撃を受け続けるアーチャー。だが、彼には磨き続けてきた心眼がある。直ぐに愛用の両手剣である「干将・莫耶」を投影し、攻撃を受けた箇所から次のそのまた次の攻撃ポイントを推定する。そして、そこに合わせて双刀を振り下ろす。

「そこだ！」

「ちっ！」

高速で動いていた反動からか、攻撃を受けた際の衝撃も大きい。デイケイドカブトの変身が解除され、デイケイドの姿へと戻る。

「まさかあれを見切るとは。言うだけのことはあるようだ」

「戦闘は能力だけではない、オレがそれを教えてやろう」

「あいにくと口うるさい奴は間に合ってるんな。さて、両手剣には両手剣……とは少

し違うが、まあ良いだろう」

デイケイドは次のカードを取り出し、再び姿を変える。

KAMEN RIDE

HIBIKI

紫の炎に包まれ妖を討つ鬼の姿——仮面ライダー響鬼——へと転じると手を払い、即座にもう一枚のカードを取り出す。

ATTACK RIDE

ONGEKIBOU REKKA

「とりあえずこの炎を喰らっていけ！」

現れた二本のバチ——音撃棒 烈火——を振りかざし、炎をアーチャーに放つ。無論、その威力は高いとは言え、双刀で軽く払われる。その間に距離を詰めたデイケイド響鬼は音撃棒をアーチャーに振りかざす。

双刀とバチの撃ち合いが暫く続くが状況は打開しない。

「さすがに強いな、これならどうだ！」

撃ち合いの反動を利用して後ろに引いたデイケイド響鬼が、すかさず一枚のカードを取り出す。——だが、いや、だからこそデイケイドは気づかない。その隙にアーチャーが一本の矢を番えて放っていたことを。



## ATTACK RIDE

## ONIBI

「ぐっ、さすがに手強いか」

読み上げ音と共にディケイド響鬼の口元から紫の炎がアーチャーに放たれ、直撃し、彼を怯ませる。

「よし、トドメだ」

アーチャーが仰け反ったのを確認したディケイドは状況が優勢だと思い、黄色のカードを取り出した。——油断からか、彼は気づかない。背後から迫る一撃に。

「喰らいつけ、フルンディング赤原獵犬！」

「何!? ぐはっ!」

背後からの一撃を受けたディケイド響鬼は、呻き声とともに倒れ再びディケイドの姿に戻る。アーチャーの放つ追尾性の一撃に確実に不意を疲れた形である。

「油断したな、仮面ライダー。貴様にこの世界は救えない。あくまで貴様は虚構なのだから」

「くっ……何だど?」

「もし違うのだと言うのなら証明してみろ! この世界にだってヒーローがいると、世界を救えるとな」

アーチャーはまるで挑発をするかの如く、デイケイドに言葉を浴びせる。それはまるで、デイケイドに勝利してほしいと願っているようですらあった。

「仮面ライダーは倒れない。俺は数多の世界を巡りそれを見てきた！ この世界に虚構しかないというのなら、俺が示してやる。何時だって、ヒーローは遅れてやってきて世界を救うってことをな！」

その言葉は、デイケイドに火をつける。かなりのダメージを負ったはずの彼は、直ぐに立ち上がり、懐より液晶の着いた端末を取り出す。

「リツカ、聞こえるか？ 宝具を使う、良いな？」

『ずっと聞こえてた。いいよ、やっちゃって。土！』

その言葉が念話で送られた直後、デイケイドの身体に大量のエネルギーが流れ込む。詰まるところ。令呪が使用された証拠である。

「どうやら、マスターからも俺は期待されているらしい。なら、せっかくだから見せてやる！ 歩くライダー凶鑑ってやつをな！ 行くぞ、最終仮面端末！」

次回、Fate／Destroyed Order

「馬鹿な……何だそのデザインは!？」

「ドクターだど？」

「唸れ、炎の巨人！」

「お願い、わたしに守る力を！」

「ロード・カルデアス。そう名付けなさい」

「まさか君から声を掛けてくれるなんてね、士」

### 第五話 「最終仮面端末」

全てを破壊し、全てを救え！

## 第五話 「最終仮面端末（ケータッチ）」

デイケイドが宝具の許可をリツカに尋ねた時、カルデア一行は相も変わらずスケルトンに加えて新たにやってきた竜牙兵の軍勢に囲まれ、それらと継戦状態にあった。

「土さん、宝具を使うらしいです。とりあえず令呪は使いましたが、もし私が倒れたら所長、フオローお願いします」

「そう……わかったわ。それにしても宝具を使う状況ってことは事態は芳しくないのかしら」

「アーチャーとライダーは少しタイプが似通ってるからな、決め手を欠いてるんじゃないかねえか」

戦闘においては素人同然のリツカ以外は手を動かしながら会話をする。マシユがリツカとオルガマリー、そしてフオウを庇い、その間にオルガマリーが魔術を用いてスケルトンや竜牙兵を一体ずつ仕留めていく。彼女たちの背後についてクーパーリンが一面を完全に受け持っている状態だ。

「先輩、土さんの宝具というのはそんなに強力なものなんですか？」

「私にもよく分からないんだ、土さんの宝具になりそうなものに心当たりが何個かあつ

て。確かさつき聞いた話だと、宝具っていうのは——英霊が生前に用いた武器や逸話が形をとったものなんですよね？」

リツカは移動中に所長などから教わった知識を改めて整理し、確認を行う。合間の時間をもつたいたいということで、リツカは移動中などに必要な知識を強制的に教わっていた。

「そうよ、宝具は英霊を象徴するもの、見たらその英霊の真名が分かるクラスのアイテム。そして、戦況を一変させられる力を持つものだと言えるわ。これまでわたしたちが辛うじて生き延びられてきたのは、黒化した英霊たちが宝具を十全に使えなかったからね。あのバーサーカーの不死身さは宝具だったかもしれないけれど、攻撃系の宝具じゃなかったから……」

「攻撃系の宝具は正しく一撃必殺の力を持つとわたしはこれまで教わってきました。そして防御系の宝具はそれらを防ぐことができる。シールドのわたしの宝具はどうやら防御系みたいですが、まだ正確に分からないというのが正直なところですよ。所で、キャスターさんも宝具はあるんですよ？」

「おう、もちろんだ。だが、使うべきところは見極めるタチだね。今はまだ時期じゃねえ。お嬢ちゃんたちには悪いが、もう少し踏ん張ろうぜ。お互いな」

「フオウフオウ！ フオフオフオフオウ！」

一切悪いと思っていないような表情で、キャスターは話す。とはいえ、彼がほとんどの敵を相手している以上、この場の誰も彼に強く言うことは出来ない。フォウが一人抗議と言わんばかりに強く吠えるが、無論聞き入れられることはない。

「ふむふむ、皆の話を総合して考えると既に士さんは宝具を使つてる気かするんだよね…… それこそ仮面ライダーに変身する力こそが宝具と言うことも出来ると思うんです」

「確かにそうね。彼は戦闘するために常に宝具を発動している、常時発動型の宝具を持つているのかもしれない。ですが、ライダークラスは大体の場合複数の宝具を持ちます。わざわざ門矢が宝具を使うと言った以上、これまでのものとは別の宝具を使うというのが正しいのではないかしら？」

「それなら、候補は2つに絞れますね。1つはケータッチ。もう1つは、ファイナルフォームライド。このどちらかになるかと」

「どつちも強そうな響きですね。それぞれどんな力があるんですか？」

リツカが述べた2つの宝具候補を聞いて、ひたすら攻撃を受け止めていたマシユの瞳が輝く。好奇心旺盛なマシユは知らない、なおかつ強そうな響きを含んだ言葉に関心を抱いたのだろう。

「まず、ファイナルフォームライドは、他のライダーを武器などに變形させて強力な攻撃

を放つものだよ。巨大な剣や弓などに変形したライダーで大技を放つ感じだね。そして、ケータツチは——ディケイドをパワーアップさせて、言わば歩くライダー凶鑑状態にするんだ」

「歩くライダー凶鑑……？ 藤丸、何を言ってるの？」

「フォウフォオ？」

KUUGA、AGITO、RYUKI、FAIZ、BLADE、HIBIKI、KABUTO、DEN—O、KIVA  
FINAL KAMEN RIDE  
DECADE

ディケイドが取り出したタッチ型の端末。それを使用した瞬間、彼の姿が変わる。

そして、その姿を見たアーチャーは困惑を隠せない様子でわなわたと震えながら声を上げる。

「馬鹿な……何だそのデザインは!？」

「ふっ、変わってると思うか? ——俺も、そう思う」

「そのようなデザインを認められるか! その姿は……その姿は……さすがに許せな

い。オレは、そのような物を仮面ライダーとは認めない！」

アーチャーは、激怒していた。正義の味方に憧れ、とうとう守護者に至るまでとなった彼は、「仮面ライダー」に関してある種憧憬に近いものを持つていた。虚構の存在であるけれど、その存在は確実に子供たちの希望としてあつたからだ。ある程度の年齢になつて以降はテレビで見ることなども無くなつては居たが、彼の中では1つの英雄像として仮面ライダーが存在していた。だが、今彼の目の前にいる「仮面ライダー」はどうだ。胸元に仮面ライダーが描かれたカードを9枚並べている。

——言つてしまえば、ダサイ。カッコよくないのだ。彼としては英雄の姿として到底認められるものではなかった。

「お前が認められるかどうかは関係ないさ。さあ、決着と行こうか！」

ディケイドは、ライトブツカーをソードモードに変形させ、その刃に手を添寄せた後、アーチャーに突進を仕掛ける。気が動転しているのか行動が遅れたアーチャーは、ディケイドが振るうライドブツカーを辛うじて受け止めることしか出来ない。

「くつ、貴様には負けん！ 貴様だけは、オレがここで倒す。投影、開始！」  
「どうやら大技らしいな。こつちも惜しみなく行かせてもらおうか」

打ち合いの衝撃を利用して再度距離をとった両者は大技の用意を行う。アーチャーは使い慣れた道具の1つを投影する。一方のディケイドはベルトに付けた端末を外し、



1つのマークをタップする。

H I B I K I

K A M E N R I D E

A R M E D

読み上げ音が鳴り響くと共に、デイケイドの隣に鎧装を纏甲った鬼響が並び立ち、胸の9枚のカード全てが装甲響鬼のものに変わる。

そして、黄色のカードを取りだし、ベルトの左サイドに移したドライバーにカードを読み込ませる。

F I N A L A T T A C K R I D E

H I H I H I H I B I K I

「受けてもらおう、偽カラド・螺旋剣ホルグII！」

アーチャーは絞った弓から極大火力の剣を放つ。一方デイケイドは並び立った装甲響鬼とシンクロして彼の必殺技である「音撃刃 鬼神覚声」を放つ。

2つの斬撃と1つの剣が激突し、その威力が相殺される。舞い散った爆風がお互いの視界を奪う中、2つの声が響く。

「投影トレス・オン、開始！」

F A I Z

K A M E N R I D E

B L A S T E R

F I N A L A T T A C K R I D E

F A F A F A F A F A I Z

爆風が晴れると、これまで構えていた双剣を拡大したアーチャーと、闇を切り裂き、光をもたらす救世主と並び立つデイケイドの姿があつた。アーチャーが迫るが、既にデイケイドは技を放つ準備を終えていた。ライドブツカーとファイズブラスターが既に構えられ、フォトンバスターが放たれ、アーチャーに直撃する。

「ぐっ……やってくれるな」

「トドメだ」

大きなダメージを受け、地に伏せたアーチャーにもデイケイドは手を緩めない。すぐさま新たなライダーシンボルをタップし、次の仮面ライダーを呼び出す。

K A B U T O

K A M E N R I D E

H Y P E R

現れたのは、未来を掴み続けるもの。デイケイドはそのまま最終仮面端末をベルトに

戻し、この勝負を終わらせるカードを読み込ませる。

FINAL ATTACK RIDE

KA KA KA KABUTO

デイクイドとカブトは高く飛び上がり、ライダーキックの構えに移行する。それを見たアーチャーは、避けることが叶わないことを悟り、敗北を確信したかのように穏やかな表情を浮かべる。

「ハイパー……キック！」

デイクイドによる技の掛け声の後、蹴りが放たれる。その一撃はアーチャーに直撃、彼の霊核を完全に破壊する。

「オレの——敗北だな」

消滅しかけるアーチャー。その表情は、憑き物が落ちたようであった。

「アーチャー、ひとつ聞かせろ。この世界で聖杯戦争は何回起きてる？」

「ほう……貴様覚えていいのか。オレは知らないが、どうやらセイバーの言っていた通りらしいな。知りたいのなら大空洞にいけ。大聖杯の前で女王がお待ちだ」

デイクイドとアーチャーは意味深な会話を行う。お互いの腹を探るような会話であったが、本人達の間では上手く伝わっているようである。

「……面倒なことになりそうだ。とにかくそのセイバーって奴に会うしかないか」

「そうすることをオススメしよう。さて、貴様の存在がこの事件にどのような影響を与えるのかは分からんが、仮に貴様が仮面ライダーだと言うのなら、世界の一つくらい救って見せろ」

「あくまで俺は通りすがりだ。——だがまあ、そう言われたら仕方ない。救ってやるよ、この世界を」

「ふっ、口が悪い奴だ……」

最後に憎まれ口を叩いてアーチャーは消失する。それを見届けてから、デイケイドはようやく変身を解除した。油断をするとアーチャーが最後の一撃を放つかもされないと考えていたからである。事実、アーチャーの性格等を鑑みるとその見立てはあながち間違いいではない。変身を解いた士はため息をつきつつ念話でリツカに連絡を取る。

「最後まで油断ならない奴だったな。……おい、マスター。勝ったぞ、今からそっちに戻る」

『士さんなら勝ってくれろと信じてた。こっちもだいたい片付いたからさっきの店で合流しよう』

「当たり前だろ、じゃあ今から戻る。待ってろ」

念話を切り、士は元の場所へとゆっくりと戻り始める。

「——状況は今報告した通り。我々はこれから最後のサーヴアクトであるセイバーの元へ向かいます」

『状況は理解しました。こちらもカルデア内生存スタッフの協力によつて何とか体勢が立て直せてきました。お戻りをお待ちしています』

士が廃店舗に戻ると、店の外でオルガマリーが誰かと通信をしていた。

「オルガマリー。戻ったが……その通信相手は？」

「ああ、彼はカルデアの医療部門のトップ、ロマニ・アーキマンよ。Dr. ロマンと呼ばれているわ」

「ドクターだと？」

『初めまして、仮面ライダー。紹介に預かったロマニ・アーキマンだ。本来ならちゃんと挨拶をするべきなんだろうけど、今現場のスタッフに呼ばれてね。申し訳ないが今はこれで失礼するよ。それでは所長、あとは手筈通りにやっておきます。そちらにご武運があることを祈ってますよ』

士が話しかけた途端、内部のスタッフに呼ばれたからという理由で通信を切ったロマニ。その様子を見て士は彼を訝しむ。

「切れたらしいな……それにしてもあの声……まさかな」

「門矢？」

「いや、何でもない。マスターは店の中か？」

「ええ、あなたの事を待ってるわ。早く行ってあげて」

士は無言で頷き、廃店舗に入る。その中には目を輝かせたマシユが待ち構えていた。

「あの、士さん！ 士さんの宝具についてお教え頂けますか！」

「マシユ……急にどうしたんだ？」

「先輩から士さんの宝具の話聞きまして。どうやらとてもカッコよさそうなのでお話を聞かせて貰えたらと！」

「マスター……どうなってる？」

「ごめんね士さん。さっきの令呪の時に士さんの宝具の話したらマシユが飛びついちゃって。あ、所で宝具って何を使ったの？」

「なるほどな。使ったのはこれだ、最終仮面端末」

そう言つて懐からケータツチを取りだし周りに見せる士。マシユ、フオウ、リツカの2人と一匹がそれを物珍しそうに眺める。

「フオウフオウ!!」

「これが本物かあ……やっぱり質感が良いよね」

「これが……歩くライダー凶鑑!!」

「おいマスター、なんか変な教え方してないか？」

「いや、だつて事実そうじゃない、あれは言葉の通りだよ！」

3人と1匹がわちやわちや団欒していると、辺りを偵察していたキャスターが帰つてきた。

「おう、元気そうじゃねえか。で、アーチャーはどうだったんだよ。どうせマスターのことも考えると少し休憩が必要だろうからその間に話を聞かせろよ」

「土さんの話、わたしも興味があります！ 主にその宝具をどう使つて戦つたのかが！」  
「フオウフオウフオウ！」

「やれやれ、まあじゃあ話してやるよ。アーチャーはな——」

「いよいよ大空洞ね。話によるとここに大聖杯があるらしいけど……」

「なんだ、所長さんは大聖杯見たことないのかよ。ありやあ最初見た時には驚くぜ。特に魔術師はな」

二時間ほどの休憩を挟み、一行はとうとう最後のサーヴァントであるセイバーがいる大空洞に足を運んでいた。

「作戦についてですが、打ち合わせ通りですよ。正直、わたしはまだ不安なのですが

……」

「マシユ・キリエライト。この作戦が成功するかどうかはあなたにかかっているわ。キャスターの情報から推測するに、セイバーの真名はアーサー王。その聖剣を受け止められるとしたら——あなたの盾だけよ」

「マシユなら大丈夫。これまで私を守ってくれた貴女の盾、信じてるから」

「先輩……でもやっぱり怖いんです。もし上手くいかなかったらって考えるとどうしても足がすくんでしまうんです……」

「仕方ないわね、ならわたしから一つ。よく聞きなさい、マシユ。あのね、——」

「これが大聖杯か。想像以上に大きいな」

途中現れた竜牙兵を倒しつつ大空洞の奥にたどり着いた一行。大聖杯を見かけた士はとりあえず首からかけたカメラで写真を撮る。現状、現像する手段はないが、彼にとって最早それはクセになっている行為である。

「うそ、極東の僻地にこんなものがあるなんて……アインツベルン、想像以上に厄介な物を用意してたのね……」

「あれ、あそこにいるのは、もしかしてセイバーのサーヴァント?」



リツカが指差した先に居たのは剣を両手で携え直立して大聖杯の前に立つ女性であつた。

「……ほう、珍しいサーヴァントが二騎もいるな」

「お前が、セイバーか」

「ふつ、久しいな、破壊者よ。今はライダーのクラスだったか？」

セイバーはデイクイドを見て、何かを知ってるかのごとく語り始める。

「アーチャーが言つてた通りだな、セイバー。以前と姿が変わっているがイメチェンか？」

「貴様も記憶を持つているとは想定外だ。だが、そちらの方が面白い。それと、その少女と一緒にいるのもまた興味深いな。運命とはほんとに残酷だ」

「セイバー、お前何を知ってる？」

「さあな。私に勝てたら教えてやらんことも無い」

「なるほどな、それなら始めようか。変身！」

KAMEN RIDE

DECADE

「その姿……やはりな。貴様らの旅は終わる。案山子ごっこも辞めにしよう。さらば

だ、人類最後のマスター。破壊者と呼んだのが貴様の運の尽きだ」

「違うな。俺たちの旅はまだ始まってすらいない。旅は始める瞬間がいちばん難しいんだ。だからこそ、俺たちはお前を倒し、この困難な旅を始める」

「面白い。私を倒せるなら倒してみるが良い！」

そう述べ、話は終わりだと言わんばかりに携えた剣を構えるセイバー。その瞬間、後ろから巨大な木の手が伸びる。

「唸れ、炎の巨人！」

その腕がセイバーを掴んだと思った瞬間、腕の中から黒い魔力が放たれ、木の腕が爆発四散する。

「キャスターか。何か仕掛けてくるとは思っていたが、やはり予想通りだったな」

「さすがにそれは想定内か……なら、こいつはどうだ！」

更に続けてセイバーの足元から極大のルーン魔術が放たれる。

「あまりに脆い！」

だが、再び魔力放出にかき消される。

「なら、これならどうだ」

ATTACK RIDE

ILLUSION

ATTACK RIDE  
SLASH

デイケイドがカードを2枚連続で読み込み、3人に分身した後それぞれがデイケイドスラッシュを放つ。本来なら予測不能なはずの連続斬撃であるが、セイバーの前ではその力も無力であつた。

「少しはやるようだが……張合いの無い！」

セイバーが剣に魔力を込め何度か振るうことにより全ての斬撃が相殺されてしまつた。

「もう良いか。すぐに楽にしてやろう」

剣をこれ以上交える必要がないと判断したのか、セイバーは剣を下ろし、魔力を貯め始める。

「卑王鉄槌、極光は反転する。光を呑め！ エクスカリバー・モルガン 約束された勝利の剣！」

そして、貯めさせまいと妨害に走つたサーヴァント達が起こす前に魔力を貯め終え、一撃を放つ。それは、反転した星の聖剣。異星の侵略者すら砕くことが可能な勝利の剣。それを防げるものは、この場にはただ一つしかなかった。

「お願い、わたしに守る力を！」

黒い光を前にして一歩も引くことなく、仲間を守らんと前に入るマッシュ。そして彼女

はここに来る途中オルガマリーから言われた言葉を思い出す。

『仕方ないわね、ならわたしから一つ。よく聞きなさい、マシユ。あのね、宝具が起動しないのはあなたのせいじゃないわ。カルデアが無茶な実験をしてあなたをデミ・サーヴァントにしたせいよ。本来なら不完全な融合だったのが、今となっては一応機能はしているものの、真名が思い出せない力だけの状態になっているの。だから、わたしから貴方に贈り物として、宝具の名前をあげるわ。真名が解放出来ないのなら、擬似展開でも良い。とにかく力をあなたのものにしなさい。名前はそうね——ロード・カルデアス。そう名付けなさい。カルデアを守りたいというあなたの気持ちならきつと使えるわ。マシユ、お願いね』

「わたしは、先輩の、所長の、皆さんの思いに答えます！ 真名・偽装登録。宝具展開！  
ロード・カルデアス  
 疑似展開／人理の礎！」

マシユが叫ぶと、先程は淡くしか現れなかった光の壁が一面を覆うように現れ、聖剣から放たれた黒き光を受け止める。

「耐えて……見せます！」

そして、エクスカリバ勝利の聖剣の光を無事受けきり、その場を凌ぐことに成功した。

「ほう……あれを受け止めきるとは。さすがの盾の性能だ」

「隙だらけだぜ、騎士王！ 今度こそ奥の手だ、焼き尽くせ木々の巨人。灼き尽くす炎の檻!!」

キャスターの宣言に伴って、5mを越す巨人が現れ、聖剣の反動に吞まれるセイバーを内部に取り込み自らの身を炎で包む。リツカたちが想定していた作戦であった。一度聖剣を打たせ、生じた隙につけ込みキャスターの宝具で灼き尽くす。手筈通りに進んでいたが、無論セイバーがその程度で終わるわけではない。

「くっ、上手くやったつもりか！ だがまだ甘い！ 約束された勝利の剣!!」

隙を無理やり超えて、聖剣の一撃で巨人を破壊、再び外に脱出した。

「セイバー、その全てが規格外！ こんな相手に、我々は勝てるの?」

最初に心が折れかけたのはオルガマリーであった。圧倒的なパワーのセイバーを見たせいで絶望に心が支配されかけていた。

「オルガマリー、また宝具を使うが構わないか!? さつきとは別のものだ!」

そんな彼女のメンタルを折らせなかったのは、ディケイドであった。彼は想定を上回るセイバーの実力にも焦ることなく戦闘をしていた。

「門矢、それで勝てるの?」

「少なくとも今よりはな!」

「なら許可します。藤丸、令呪でバックアップ!」

「分かりました！ 士、受け取って!!」

「助かった、マスター。おい、海東！ いるんだろ？ 手を貸せ！」

令呪によるバックアップを受けたデイケイドは虚空に向かつて叫ぶ。すると、誰もいなかったはずの場所から、マゼンタカラーのデイケイドとは対象的なシアンカラーの銃を構えたライダーが現れる。——仮面ライダーデイエンドである。

「まさか君から声を掛けてくれるなんてね、士。正直な話、少し気味が悪いけれど、君から頼まれるというのは珍しい。それに免じて今回だけは助けてあげるとしようか！」

次回、Fate/Destroyed Order

「これが……ファイナルフォームライド!？」

「そんな、私が既に死んでいる……?？」

「どうすれば彼女を助けられる!？」

「光写真館にようこそ。歓迎しよう」

「それとも、こう呼んだ方が良いか？」

「じゃあ、十一年前の話をしようか」

?????????

第六話 「ボンス・オブ・ジャーニー永き旅の朋友」

全てを破壊し、全てを救え！